

特 109
464



始



持109
469



す
雪

大正
8 4.28
内交

うす雪目次

其一	雪の日	二
其二	藤の紋	二一
其三	短刀	四三
其四	妹の戀	六六
其五	進藤老人	八七
其六	夢か眞か	一〇一
其七	銀紙と手紙	一二七
其八	海岸の一夜	一四五

海賊船目次

其一	兵庫の曉	二
其二	女七人	二四
其三	輕業師	四四
其四	兩國	六五
其五	置いてけ堀	八六
其六	壁の穴	一二二

うす雪

岡本綺堂

其一 雪の日

(1)

「兄さん。どうしたもんでせう。」

須郷貞子は婦教雑誌社の接應室にその蒼ざめた顔を出した。正月下旬の寒い日で、彼女のコートの袖や裾には薄い綿のやうな雪が疎らに粘り着いてゐた。

「とうとう降り出して来たね。二三日前から催してゐたから、どうしても一度は降るだらうと思つてゐたよ。」

兄の匡三は扉をあけて入ると、すぐにその椅子に腰を卸して、一刷毛うすく撫

でられたやうな家々の白い家根を三階の硝子窓から瞰下した。

「雪は大きい。これぢやあ幾らも積るまいな。」

そんな挨拶は面倒だといふ風に、貞子は突つ立つたまゝで又叫んだ。

「兄さん。ほんたうに何うしたもんでせうねえ。」

「何だ。だしぬけに……。」と、匡三は微笑んだ。「まあ、おかけよ。」

椅子を指さゝれても貞子は矢はり突つ立つてゐた。彼女は兄の前でコートをぬぐのも忘れたほどに狼狽へてゐるらしかつた。その取亂した態度が兄の眼にも付いたと見えて、匡三も額を少し皺めた。

「一體どうしたんだ。何の用だ。」

「實はね、兄さん。」

云ひかけて彼女は狐のやうに背後を見かへつた。さうして、急に聲を低めた。

「實は、雪子さんが見えなくなつたんです。妾ほんたうに吃驚してしまつて、何

うしようかと思つてゐるんです。」

「雪子さんが……。」と、兄も急に眼を睜つた。「どうして、何日……。」

「それが判らないんですけれど、昨夜の十二時頃から今朝の六時までの間に……。」

「可怪いな。」

「どうしたら可いでせう。」

斯ういふ中にも貞子の顔色はだん／＼に蒼ざめて來た。彼女はもう眞直には立つてゐられないやうに身を戰慄かせて、卓子掛の端を固く握りしめてゐた。匡三も小首をかして少時考へてゐたが、やがて又徐かに訊いた。

「で、何にも心當りはないんだね。」

勿論だと云はないばかりに貞子はすぐに首肯した。

「妾も吃驚して、すぐに方々を探したんですけれど、どうしても知れないんです。

何しろ、隣に寝てゐた登美子さんさへ些とも知らない位なんですもの、ねえ、兄さ

ん。どうしたら可いでせう。」

同じやうなことを幾たびか繰返して、貞子は兄の救ひを求めらるやうに口説いた。

併し差當つては匡三にも何とも返事の仕様がなかつた。

「まあ、落付いて話してくれ。唯無暗に騒いでも仕様がな。その前後の事情を能く訊いた上で、また何とか考慮が付くかも知れないから。」

「ですけれども、兄さん。もし何うしても雪子さんが知れなくなつたら妾どうしませう。」

貞子は袂からハンカチーフを探り出して、兩の眼をひたと掩ひながら嗚咽を始めた。兄も少し持餘して叱るやうに云つた。

「馬鹿な。泣いてゐたつで仕様がな。よく其事情を話せといふのに……。雪子さんだつて自然に消えて失る譯のものぢやない。吃と何處かにあるに決つてゐる。まあ、安心してゐるが可い。」

須郷匡三は大學にゐる當時から其文名を世間に知られて、卒業すると同時にこの婦教雑誌の編輯長に聘せられたが、彼の編輯する雑誌の信用は年ごとに加はつて、今では數多い婦人雜誌界の王と稱へられるやうになつた。匡三は三十一の今年まで未だ獨身であつた。親から譲られた少からぬ財産もあり、自分も雜誌社から相當の給料を受取つてゐながら、外見を飾らない彼は牛込の江戸川端に小さい二階家を借りて、老婢一人と書生一人の至極質素な併し氣樂な生活を營んでゐた。

妹の貞子も高等の教育をうけて、今では某女學校に教鞭を執つてゐるが、彼女は兄と二歳違ひの二十九で、教育家としては比較的年の若いにも拘らず、素養の深い、品行の正しい女流教育家として、寧ろ兄以上に世間から尊敬されてゐた。その

結果、彼女自身が進んで計畫した仕事ではなかつたが、自然に他から強られたやうな形になつて、自分の家に五六人の女生徒をあづかつて監督することになつた。彼女は雜司ヶ谷邊に庭の廣い家を借りて、炊事の女中二人を雇つて、自分もその女生徒達と一所に寢起をしてゐた。彼女の家は小さい寄宿舎であつた。

勿論、自分を見込んで其監督を委託された以上、誰の娘に對しても厚薄はないのであるが、取分けて彼女が注意を拂はなければならぬのは栗田男爵家の令嬢雪子であつた。相手が華族の子であるので、貞子も一度は斷つたが、母の栗田夫人からくれぐれも頼まれた。

「あなたを見込んで是非お願ひ申します。自分の妹だと思つて御遠慮なしに叱つて教へてください。」

斷り切れなくなつて貞子も承知した。雪子は明けて十六で、流石は華族の娘であるらしい氣高い人品と美しい顔容とを具へてゐた。性質も柔順で温和かつた。雪子

は去年の春から雜司ヶ谷の小さい寄宿舎へ来て、ほかの娘達と一所に晝は學校へ通つてゐた。栗田夫人も時々になづねて来て、彼女の監督のよく行き届くのを感謝してゐた。

その雪子が昨夜から今朝までの間に突然ゆくへを晦ましたと云ふのである。監督者の貞子がいつになく取亂して狼狽騒ぐのも無理はなかつた。無理はないが、たゞ泣いてゐても仕様がなない。平素は伶俐なやうでも矢張り弱い女だなど、兄の匡三は少し齒痒くもなつて来た。

「おい、どうしたんだ、早く話して聞かせないか。雪子さんはその前の晩まで何にも變つたことはなかつたんだね。」

「いゝえ、何にも……。いつもの通り、五時にお風呂へ入つて、六時に夕御飯を喫べて、それから一時間ほど休息して、七時から九時まで復習をして、十時に寢床へ入つて……。わたくしが十二時に見廻りに行つた時にも、たしかに寢てゐたんです

が……。」

「今朝になつて初めて発見したんだね。誰が一番先に気が注いだんだ。」

「矢張り妾です。どうしても寒い間は皆なが朝寢をしますから、妾が毎朝起しに廻るんです。」

「隣に寢てゐた登美子さんも知らなかつたんだね。」

「わたくしに起されて、初めて気が注いだんです。」

「何か書置のやうなものも無いんだね。」

貞子は無言で頭を掉つた。

(三)

「雪子さんは學校の成績は何うなんだね。」と、匡三は訊いた。

「一番ぢやありませんけれど、大抵五番か六番ぐらゐで、決して悪い方ぢやありません。水畫なんぞは中々巧く描くんです。」と貞子は答へた。

「ほかの寄宿生と折合の悪いやうなこともないんだね。」

「おとなしいお嬢さんですから、そんなことはありません。雪子さんが見えなくなつたと云つて、皆なも今朝から泣いてゐる位です。」と、貞子も聲を濕ませた。

匡三はまた黙つて、二人の間に置かれた角火鉢の灰を見つめてゐたが、やがて探るやうな眼をして窃と訊いた。

「雪子さんは明けて十六、別に戀愛問題なんぞはあるまいね。」
失禮なことを訊くと云ふやうに、貞子は濕んだ眼を輝かせて明快と答へた。

「兄さん、そんなことを……。」

「いや、怒つちや困る。何も参考の爲だから、訊、だけのことは訊いて置く。そこで、取あへず栗田家へも聞合せて見たのか。」

「でも、うつかりそんなことを云つて行かれませんか。警察の方へもまだ届けちやありません。ねえ、兄さん。」と、貞子は噁りあげて又泣き出した。「若もこんなことが世間へ知れたら、妾は何うなるでせう。第一、栗田夫人に對つて、何と云つて言譯をしたら可いでせう。妾、もうそれを考へると、氣狂ひのやうになつて了ひますわ。」

他の娘をあづかつて、斯ういふ事件が出来しては、普通の者でも無論に責任は免れない。況て教育家として、自分の監督してゐる生徒が行方不明になつたとあつては、その責任は更に重いことになる。この際、彼女が氣狂ひのやうになつて騒ぐのが寧ろ當然ではあるが、兄は兄だけに、この事件の性質を更に冷静に考へたかつた。「可、それで大抵判つた。私も能く考へて見よう。」

「考へて見ようぢや困りますわ。」と、貞子は怨むやうに云つた。「今すぐは何とかして下さらなければ、妾、寧ろもう自殺でもして……。」

「つまらないことを云ふもんぢやない。今朝の今で、まだ半日と経つか経たないのに、死ぬの生きるのと騒ぐことがあるものか。何しろ月末で、社の方も忙しいから今すぐに何うと云ふ譯にも行かない。お前は一旦まあ家へ歸つておとなしく待つてゐてくれ。私は社の用を片附けると、すぐに行くから。」

貞子はまだ何だか氣が濟まないやうな顔をしてゐるのを、匡三は宥めるやうにして應接室から押出した。

「ぢやあ、屹と来て下さいますね。」

「むい。屹と行く。」

俯向勝に三階の階子を悄然と降りてゆく妹のうしろ姿を見送つて、匡三は急いで編輯室へ入つた。彼は差迫つた用事を片附けて、午餐を喫つて、あとを他の編輯員に頼んで、三階から二階へ、二階から下へ、靴を早めて降りて來ると、受付係の前で何か訊いてゐるらしい若い男があつた。男は匡三の顔を横眼に視ると、慌て

て逃げるやうに表へ出て行つてしまつた。

「見たことのあるやうな男だ。」と、匡三は思った。

(四)

「どうく降つてまゐりました。」

受付係の老人は匡三を送るやうに會釋した。これに氣が注いたやうに、匡三は立停つて訊いた。

「今こゝにゐた若い人は何の用で來たんですね。」

「須郷さんが—あなたの妹御さんが來てゐらつしやらないかと訊きに來たんです。もう少し先刻お歸りになつたと云ひますと、何にも云はないで直に行つてしまひました。」

「先方の名は云はなかつたかね。」

「いえ、別に何とも云ひませんでした。」と、受付係は自分の不注意を悔むやうな顔をして答へた。匡三は却つて氣の毒になつた。

「何、訊かなくつても可いんです。」

オヴァコートの袖を通しながら表へ出ると、雪はまだ疎らにちらり／＼降つてゐた。傘を持たない匡三はコートの襟を引き立て、有樂町の電車路へ出ると、春の雪だけに往來はもう泥濘つてゐた。日比谷公園の堤の松が薄白くなつてゐるのを横に見ながら、彼はそこに北行の電車を待つてゐると、彼のほかにも同じく佇立んでゐる三つ四つの傘の影が見えた。その傘のかげに隠れるやうに、黒いマントの袖ををかき合せて忍びやかに立つてゐる一人の若い男があつた。彼も匡三と同じやうに傘を持つてゐなかつた。

それが唯つた今、社の受付で見かけた男であることを匡三はすぐに覺つたので、

彼は傘の間から再びその男の横顔を覗くと、彼は二十三四の瘦形の、色の白い、眼付の涼しい書生風の男で、マントの裾からセル地の袴があらはれてゐた。彼は何だか落付かないやうな風で、時々左右を偷み視ながら、他の傘のかげに身體を忍ばせてゐた。

「見たやうな男だ。」と、匡三はもう一度考へた。その中に彼はふと思ひ出した。その男は栗田男爵家の書生で、名は知らないが進藤といふ男であつた。彼は栗田夫人の供をして時々貞子の家へ来たこともあつた。夫人の使で、自分一人でたづねて来たこともあつた。匡三も貞子の家で一度彼と挨拶したことがあつた。

「何の用があつて、進藤が貞子のあとを追つて来たのだらう。」

雪子が行方不明になつたことが、もう何時の間にか栗田家の人々の耳にも入つて彼はその詮議に來たのではあるまいかと、匡三はすぐに想像した。たとひ然うでないにしても、彼の口から何かの手がかりを聞き出すやうなこともないとは限らない

と思つたので、匡三は邪魔になる傘の間をくゞつて、彼に聲をかけようとする時に恰も北行の電車が来たので、進藤は待兼ねたやうに人を掻退けて直に飛び乗った。匡三も乗った。

雪の日の故か、車内は殆ど満員であつた。進藤も匡三も吊革に手をかけて、揺られながらに運ばれて行つた。二人の間には脊の低い一人の女が挟まつてゐた。その女の肩越しに匡三は背後から聲をかけた。

「進藤さん。」

進藤は振向いた。彼は匡三を見て笑ひながら會釋した。

「あなた、今わたくしの社へお出でしたか。」と、匡三は訊いた。

「はあ。貞子さんがおゐるかと思ひまして……。さうしたら、もうお歸りになつた後で……。」

「妹に何か御用でしたか。」

進藤は少し躊躇してゐるらしく、すぐには何とも云はなかつた。

(五)

この満員の電車の中で滅多なことも云はれまい。進藤が返事に困つてゐるのも無理はないと匡三は推量したので、彼も少時はそのままに口を噤んでゐると、進藤の方から更に訊き返した。

「貞子さんは何か御用があつて御社へお出になつたんですか。」

今度は匡三の方で返事に詰つた。彼は左右の人達の顔色をうかがひながら曖昧に答へた。

「えゝ、ちよいと用がありました……。あなたは何かお急ぎの御用ですか。」

「えゝ。」と、進藤も同じく曖昧な返事をしてゐた。さうして、陰つた窓隙子を時々

に撫で、ゆく雪の花片を眺めてゐた。

「真直にお邸へお歸りですか。」

「はあ。すぐに歸ります。」

これ以上には何を云ふことも出来ないで、匡三は焦つたいのを堪へてゐると、電車はやがて小川町へ着いた。番町の栗田家へ歸る進藤も、江戸川へゆく匡三も、こゝで乗換へなければならぬので、二人は乗換の切符を貰つて降りた。

「あの、進藤さん。ちよいと。」

白くなつてゐる街路樹のかげへ進藤を招いで、匡三は囁いた。

「くごくお訊ねするやうですが、あなた、何の御用で社へお出になつたんです。」

進藤は黙つてゐた。

「もしや雪子さんのことぢやないんですか。」

堪へ切れなくなつて、此方から思ひ切つて斯う切出すと、進藤は怪訝な顔をして

ゐた。

「雪子さんが……お嬢さんが何うかしましたか。」

「實は、昨夜から今朝までの間に、雪子さんが行方不明になつたんです。」

「ほんたうですか。」と、彼は自分の耳を疑ふやうに訊き返した。さうして、それが疑ひもない事實であると知つた時に、彼も顔の色を變へた。

「それに就て、あなたに何か御心當りはありますまいか。」と、匡三は訊いた。

「さうですなえ。」

進藤は暗い空を仰いで少し考へてゐたが、結局自分には何の心當りもないこのことであつた。匡三は失望した。

「併しこの事はまあ何人にも云はずに置いてください。妹もひどく心配してゐますから、この際お邸の方から又何か沙汰でもあると猶々氣を揉んで……。現に寧ろ自殺するなんて馬鹿なことを云つてゐる位ですから。」と、匡三は頼むやうに口止をし

た。

「判りました。併し大變ですわね。」

「全く心配です。あなたにも何かお心當りがありましたらお知らせ下さい。」

「無論すぐにお知らせ申します。」

江戸川行の電車が先へ来たので、匡三は進藤に挨拶して乗った、乗りながら見かへると、進藤は雪だらけの街路樹に倚かゝつて、夢見る人のやうに何か考へてゐるらしかった。

終點まで真直に行き着いて、それから人車で雑司ヶ谷へ行かうかと思つたが、今夜は歸宅が遅くなるかも知れない、或は妹の家へ泊るやうなことになるかも知れない。匡三は書生にそれを断つて行かうと思つたので、江戸川端で電車を一旦降りた。さうして、自分の家の小さい門をくゞると、格子をあける音を聞き付けて、書生の井倉がすぐに飛出して來た。

「お歸りなさいまし。」

彼の仔細ありげな顔容が匡三の眼についた。自分の留守にも何か事件が出來たのではあるまいかと一種の不安を感じながら、匡三はコートの雪を拂つて沓脱に立つた。

其二 藤の紋

(1)

すぐに又出る積りの匡三は、靴をぬがないで上框に腰を卸した。

「留守に誰も來なかつたかね。」

にや／＼と笑つてゐるのです。その様子が何うも唯の人間でない、恐く氣狂ひぢやあるまいかと思はれましたので、私も油斷せずじつと見つめてゐますと、老人は急におとなしい、氣味の悪いほどに沈んだ聲で、須郷貞子といふ女はほんたうに居ないかと又訊くのです。私もいよ／＼不安心になつて來たので、そんな人は居ないときつぱり云ひ切つてしまひますと、老人は何にも云はずに表へすつと出て行つて了ひました。」

「貞子はそれを知つてゐるのか。」

「それから私が奥へ行きますと、貞子さんは見えないのです。」

「貞子が見えない。」

「老婢に訊くと、茶の間にある筈だと云ふのですが、その茶の間に見えないのです。わたくしも何だか煙にまかれたような心持になつて、念のために二階へ行つて見ると、貞子さんは二階の縁側へ出て、怖いやうな眼をして表をじつと覗いてゐまし

た。」

「それから何うした。」

「匡三も耳を澄まして聽いてゐた。」

(11)

「聲をかけて驚かすのも悪いと思つて、わたくしは其のまゝ竊と下へ降りて來ますと、それから五分間ほど經つて、貞子さんもまた竊と降りて來ました。」と、井倉はつゞけて話した。それから私が茶の間へ行つて、變な老人の來たことを話しますと、貞子さんはそんな人間を識らないと云ひました。」

「ほんたうに識らない様だつたか。」と、匡三は訊いた。

「さあ。どうですか知ら。兎にかく識らないと云ふことでした。さうして、兄さん

は未だなか〜、歸りさうもないから、妾はもうお暇しますと云つて、すぐに歸つてお了ひなさいました。」

「さうか。」と、匡三は息を吐いた。

「さうして、その可怪な老人といふのは何んな身分の人間らしかつたね。話の様子から考へると、商人ぢやあないらしいね。」

「まあ、貧乏士族と云ふやうな、恐く官吏かなんかの古手でせうよ。何しろ、あんな横柄な奴は滅多にありません。どうも些と氣が可怪いんぢやないかと思はれますあの凄いやうな眼附が唯の人間ぢやありませんでしたよ。」

「どんな衣服を着てゐた。」

「二重廻しを着てゐたので、よくは判りませんでした。何でも古ぼけた袴を穿いて、色のもう褪めかゝつた黒の羽織を着て、羽織の紋は下り藤のやうでした。彼奴は氣狂ひか、左もなければ一種の錢貫ひですよ。社會に名の賣れてゐる婦人達を訪

問して、脅迫的に幾許かづつ貰つて歩くのかも知れませんかよ。」

その老人に對して、井倉は餘ほど感情を害してゐるらしく、口を尖らせて彼を罵倒してゐた。さうして、彼を貞子に引合せなかつた自分の先見を誇るやうにも見えた。その話を皆な聽いてしまつて、匡三は起ち上つた。

「私はこれから貞子の家へ行く。」

都合によると泊るかも知れないと云ふことを斷つて、匡三は洋傘を受取つて表へ出た。出る時に衣兜から時計を出して見ると、午後二時を少し過ぎてゐた。雪はいつの間にか降歇んだが、鼠色の厚い空はまだ一面に都の上を掩つてゐた。匡三は再び電車に乗つて、江戸川の終點で降りると、俄の雪で人車は皆な出拂つたと見えてその停留場には一臺もなかつた。

よんどころなしに匡三は洋傘を杖にして、大根卸しのやうな雪融路を拾ひながら歩いて行つた。たび〜歩き馴れた路ではあるが、底冷のする寒い日にこの泥濘を

渡つてゆくのは、彼も少しく難儀であつた。目白臺をあがつて雑司ヶ谷へ入ると、古風な杉の生垣に沿うてすた／＼歩いてゆく一人の老人のうしろ姿が眼に入つた。老人は黒の中折帽をかぶつて、古ぼけた二重廻しを着てゐた。

その風體が井倉に罵られた彼の怪しげな老人らしいので、匡三は駈けぬけて其顔を見ようとした。併し彼は老人にも似合はず、非常に足が捷かつた。彼は泥濘のまん中を平氣で眞直に歩いてゆくのので、路を擇つて歩いてゐる匡三は容易に追ひ付かれさうもなかつた。

(三)

一種の好奇心も手傳つて、匡三は遮二無二その老人の顔が見たくなつた。彼はズボンの裾をまくり上げて、老人のあとを追ふやうに泥濘のまん中へ踏み込んだ。泥

の飛沫をあげることを覺悟すれば、年の若い彼は流石に老人を駈け抜けることが出来たので、一間ばかり行き過ぎて振り返ると、その人相も風體も確實に井倉から聞いた其人らしく思はれた。併し彼は一面識もない老人にむかつて、無暗に物を云ひかける譯にも行かないので、じろりと視たゞけで通り越して了つた。

この老人は何の用があつて貞子をたづねるのか。井倉の想像通りに、それが氣狂ひや錢貰ひであれば論はない。若も何か相當の理屈があるとするれば、匡三はその理屈を知りたかつた。さうして、この老人と雪子との間に何かの糸が繋がれてゐるのではないかなどとも考へられた。七八間行き過ぎて又見返ると、老人は急に足止めて鳥渡思案してゐるらしかつたが、やがて路傍の小さい居酒屋のやうな店へ入つてしまつた。いつ出て来るか判らないものを往來中でべん／＼と待つてもゐられないので、匡三も思ひ切つて歩き出した。

雑司ヶ谷の町も既う郡部に近いところに、貞子の家はあつた。家の周圍には長い

竹垣をめぐらして、門の前には目標のやうな大きい樺が一本高く突き出てゐた。潜り門の扉は外から引いても明かなかつた。

匡三は焦れて二三度叩いたが、玄關までは相當の距離があるので、内では何の返答もなかつた。晝間から何で錠を卸したかと思ひながら、勝手に心得てゐる彼は更に裏手の方へ廻つた。そこには小さい木戸があるので、彼はそれに手をかける。この戸もしつかりと閉まつてゐるらしかつた。それでもこゝは臺所に近いので、彼が幾たびか叩く中に、女中のお仙が聞付けて出て來た。

「何人でございます。」と、彼女は内から恠々訊いた。

「私だよ。早くあけてくれ。」

その聲に安心したらしく、お仙はあわてゝ木戸をあけた。

「どうも濟みません。」

「何だつて方々の入口を閉めて了つたんだ。」と、匡三は叱るやうに訊いた。

「あの、先生が皆な閉めて置けと仰しやいましたので……。」

「貞子はあるか。」

「はい。」

匡三は庭を廻つて、貞子の居間の縁先に立つた。内を覗かうとして氣が注くと、何の障子の腰硝子にも眼隠しをしたやうに白い紙が貼つてあつた。

「おい、貞子さん。」と、匡三は縁に腰をかけて呼んだ。内ではすぐに返事をしなかつたが、二三度つゞけて呼ばれて、貞子は低い聲で答へた。

「兄さん。おあがり下さい。」

斯う云つたばかりで、彼女は障子を明けなかつた。匡三は泥靴をそこに脱いで、縁側から遠慮無しに内へ入つた。

(四)

居間と書齋とを兼ねてゐる八疊の一室の片隅に机を据ゑて、貞子はその机の前に幽霊のやうな顔をして座つてゐた。それでも兄の入つて来たのを見て、彼女はふらふらと起ち上つて、座蒲團を持ち出して火鉢の前に敷いた。その蒲團の上に膝を、顔して、匡三は火鉢に手をかざすと、炭はもう皆な冷たい灰になつてゐた。

「おい、些と火を起さないか。寒いぢやないか。」

貞子は黙つて炭取を引き寄せて、火鉢に炭を補ぎ始めた。その白い手先を匡三も黙つて眺めてゐたが、やがて衣兜から巻簀を探り出しながら訊いた。

「雪子さんの消息は矢張り知れないのか。」

貞子は矢張り無言で首肯した。

「お前は先刻わたしの家へも来たさうだね。社の歸途に寄つたのか。」

「家へ歸つてもじつとしてはゐられないだらうと思つて、あなたのお歸りを待つてゐる積りでお宅へ寄つたんですが……。」

「そんなら待つてゐれば可いのに……。お前が歸つたあとへ私もすぐに歸つたんだ。」

少し紅くなつた炭火を眺めながら、貞子はたゞ俯向いてゐると、女中のお仙が紅茶を運んで来た。

「寒いね。」と、匡三はすぐに茶碗を引寄せて角砂糖を入れた。

「今日は随分冷えます。」と、お仙は挨拶して起たうとするのを、貞子は急に呼び止めた。

「兄さんのほかには誰も来ませんでしたか。」

「はい。何人も……。」

女中が出て行つたあとは、又少時の沈黙がつづいた。寒さ凌ぎといふやうな料見で、匡三は熱い紅茶を吹きながら飲んだ。

「社から歸る途中で、電車の中で進藤君に逢つたよ。」と、匡三は茶碗を措いて云つた。

「進藤さんに……。」と、貞子は眼を輝かした。「さうして、何か云ひましたか。」

「進藤君は何にも知らないらしかつたよ。併し何か頻りにお前を探して歩いてゐるらしいせ。私の家へ来てそれから社の方へも来たよ。一體何の用があるんだらう。」その疑問には答へないで、貞子は突然にこんなことを云ひ出した。

「兄さん。雪子さんを隠した人は……。妾大抵想像が付きました。」

「む、誰だ。」と、匡三は一膝ゆすり出した。

「芹澤さんです。」

「家壽子さんか。」と、匡三は吃驚したやうに叫んだ。

「兄さんは屹と何とか云つて辯護なさるでせうけれど、妾は恐くあの人の仕業だらうと思つてゐます。先刻までは妾もまだ半信半疑でゐましたけれど、家へ歸つてから愈よそれに相違ないといふ證據があがりました。」

「さうかしら。」

まだ疑ふやうな眼をして考へてゐる兄の顔を、冷笑ふやうにじろりと視て、貞子は皮肉らしく云つた。

「兄さんの前ですけれど、妾これから芹澤さんを仇だと思ひますから。」

(五)

芹澤家壽子は貞子と同じ女學校の教師で、平素から姉妹のやうに仲よく交際つてゐた。そればかりでなく、貞子は彼女と親くしなければならぬ理由が他にもあつ

た。その家壽子を仇と呪ふには能く／＼確實な證據がなければならぬので、匡三は早くその證據を見せて貰ひたかつた。

「そこで、家壽子さんが何うしたと云ふんだ。家壽子さんが雪子さんを隠したとでも云ふのか。」

「妾は然う思ひますわ。」と、貞子は信するやうに云ひ切つた、だつて今朝わたくしが家を出るとすぐその後へ家壽子さんが訪ねて来たさうです。」

「學校の往に誘ひにでも来たんだらう。」と、匡三は云つた。

「あの人はこれまで一度でも誘ひに来たことなんぞありません。」と、貞子は睨み返した。さうして、雪子さんは學校へ行つたかと女中に訊いたさうです。芹澤さんは乾と雪子さんを何處かへ隠して置いて、あとはどんなかと此方の様子を窺ひに来たに相違ないんです。」

それだけの事かと云ふやうに匡三は微笑んだ。單にそれだけで家壽子を一圖に疑

ふのは、女の邪推に過ぎないと彼は思つた。それと同時に、彼は一種の軽い安心を覺えた。

「それだけのことで家壽子さんを疑ふのは無理だよ。様子を窺ひに来たのか、ほかに用があつて来たのか、判るもんぢやない。第一、何の目的で家壽子さんがそんなことをしたのか、その理由が判らないぢやないか。」

それは自分を陥れる爲であると貞子は云つた、同じ學校の教壇に立つてゐても家壽子は自分よりも地位が低い世間の信用も薄い。その嫉妬から彼女は自分が監督してゐる女生徒を誘拐して、自分の名譽と信用を傷けようと企てたに相違ないと貞子は主張した。成ほどそれにも一應の理屈が無いではないが、あの家壽子に限つてそんな陰謀を巧らむ筈がないと匡三は固く信じてゐた。その顔色を看て取つて、貞子は又斯う云つた。

「兄さん。あなたはまだ妾の云ふことを信じて下さらないんですか。」

「でも、家壽子さんがそんなことをする筈がない。まあ、考へて見ろ。家壽子さんとお前とは……。」

云ひかけて口を噤むと、貞子はまた冷笑つた。

「未來の姉妹だと云ふんでせう。その姉妹にはなりたくありません。妾は芹澤さんともう絶交します。いゝえ、兄さんが幾ら辯護なすつても既う駄目です。どう考へても、芹澤さんは妾の仇です。」

「お前はひどく亢奮してゐる。まあ、落着いて私の云ふことを聴くが可い。」

「いゝえ、聴くには及びません。芹澤さんの辯護なんか聴きたくありません。」

「辯護ぢやない。私はお前と一緒になつて、この問題を眞面目に解決しようとしてゐるんだ。」

「芹澤さんといふ人が現れては、もう兄さんに眞面目の解決は出来ません。」

匡三も少し勃然とした。そんなら勝手にしろと云ひたいのをじつと堪へて、彼は

徐かに荳を燻らしてゐた。

(六)

「すると、私は何しに來たのか判らない。お前と喧嘩をしに來たやうな譯になるんだね。」

匡三も皮肉らしく云つて、荳の喫殻を火鉢の灰に突き刺した。貞子は屹と唇を結んだまゝで何とも返事をしなかつた。

「ぢやあ、私はもう歸つても可いんだね。」と、匡三は念を押すやうに云つた。「こゝでお前と兄妹喧嘩をして見ても詰らないからね。」

「妾、今日まで兄さんと一度も喧嘩をしたことはありません。」と、貞子は冷かに云つた。

「でも、現に喧嘩を吹っ掛けてゐるぢやないか。が、まあ、それは可い。そこで歸り際に訊いて置きたいのは、假に家壽子さんが然ういふ陰謀をめぐらしたとして、それに對してお前はこれから何う爲ようと云ふんだ。」

「それは、妾にもまだ判りません。今夜ゆつくり考へさせてください。」
云ひかけて、貞子は美しい齒を少し剥き出した。

「併しあなたはこれから芹澤さんのところへ行つて、妾が斯う云つてゐると云ふことを皆な御報告なさるでせうね。芹澤さんは好い味方を有つてゐて仕合ですわ。」

いかに神経が亢奮してゐると云つても、平素は斯ういふ性質ではなかつたのに、どうして期んな邪推と偏執とに満たされたやうな醜い女に生れ變つたのかと、匡三は妹を憎むよりも寧ろ情ない悲しむやうな暗い心持になつた。彼はもう一度黙つて妹の顔を見直すと、平素は女として先づ十人並以上であるかのやうに兄の眼にも映つた彼女の眉も眼も口も今日は著しく不規則に歪んで、その高い鼻ばかりが際

立つて尖つてゐた。彼女はさながら般若の假面を着けてゐるやうにも見えた。

この場合、斯うした女と何時まで議論をしてゐても際限がない。今日はこのまゝ、温和く黙つて歸つて、彼女の神経の少し鎮まるのを待つて、改めて又何かの相談をするより他はあるまいと、匡三は料見を決めた。彼は新しい葺に火をつけて起ち上つた。

「ぢやあ、私はもう歸るよ。」

「左様なら。芹澤さんによろしく。」

匡三はそれを聞き流して縁側に出ると、貞子は居所から首を伸ばして見送りながら云つた。

「兄さん。今日はもうこれで御免ください。」

彼女は兄を送つて出ようともしなかつた。それには頓着せず、匡三は十分に靴を穿いた。さうして、庭傳ひに舊の裏口へ廻つて行つた。

「もうお歸りでございますか。」と、水口に立つてゐたお仙が會釋した。匡三は行きかけて立戻つた。

「あのね。妹は何だか些と様子が變だから、よく氣をつけてお呉れよ。お清にも然う云つて……。可いかい。頼むよ。」

「はい。」とお仙は何だか不安らしく首肯してゐた。

裏口の木戸を出て、竹垣に沿うて表へ出ると、匡三は一人の老人に出逢つた。彼は例の老人で、居酒屋で餘ほど飲んで來たらしく、その眼は充血したやうに赤くなつてゐた。彼は二重廻しの右の羽をまくり上げて、自然木の太いステッキを杖にしてゐた。摺違ふ時に、彼の羽織の右の袖に下り藤の紋がちらりと見えた。それは井倉からも先刻聞いてゐたが、匡三は眼のあたり到此の紋を見て不圖思ひ出した。

栗田家の書生の進藤も矢はり下り藤の紋を附けた羽織を着てゐたらしい。匡三は立停つて老人のうしろ姿を見送つた。老人の面差もどこやら彼の進藤に似通つてゐ

るらしく思はれて來た。

其三 短 刀

(一)

老人は進藤の父か叔父か、いづれにしても何かの親戚らしいと匡三は直覺した。進藤が貞子をたづね歩いてゐる、その親戚の老人がまた同じやうに貞子を追ひ廻してゐる——これには何かの仔細がなければならぬ。斯う思ふと、匡三は單に一種の變り者としてこの老人を見逃す譯には行かなくなつた。彼は俄に引返して、ぬき足さして老人のあとを尾けてゆくと、老人は竹垣に沿うて裏口の方へ廻つた。さう

して、匡三が今出て来た木戸口から案内も無しに入つて行つた。お仙は木戸に錠を卸して置かなかつたらしい、老人の姿はすぐに内へ呑まれた。

匡三は不安になつた。彼の老人は貞子をたづね當て、何ういふ行動を取るであらうか。酒氣を帯びた怪しげな老人——それを思ふと、匡三はもう打捨つては置かないので、彼もすぐに後から木戸を窺とあけて入ると、案外に足の捷い老人の後姿はもう其處らに見えなかつた。匡三は庭傳ひに貞子の居間の方へ行つた。

「不可ません、不可ません。あなたは何しに來たんです。」

劈くやうな貞子の聲が耳を貫いたので、匡三はいよ／＼愕然とした。彼はその聲のする方へ急いで駆けてゆくと、老人はもう縁側にあがつてゐた。貞子は眞蒼な顔をして突つ並つてゐた。

「悴を出せ。悴は何處にある。」と、老人は吠えるやうに怒鳴つた。

「知りません。存じませんわ。」と、貞子は顫へ聲で答へた。

「知らんことはない。すぐに悴を出せ。不埒な奴等だ。」

「いゝえ、こゝにはありません。」

「居ないことはない。隠すな。」と、老人はまた哮つた。彼の長い髯はさや／＼と音がするほどに戰慄いて、握り固めた両手の拳も憤怒に顫へてゐるらしかつた。

「でも、全く知らないんです。どうぞ歸つてください。」

「馬鹿を云へ。悴を出さん中は一足も動くものか。さあ、賣女め。悴を出せ。俺が大事の悴を貴様達にあづけて置かれると思ふか。」

もう問答は無益と思つたらしい、老人は懷中を採つて塗鞘の短刀をとり出した。「これを見る。家重代の二字國俊だぞ。武士の魂はこれに籠つてゐると思へ。」形勢がいよ／＼穩和でないと見たので、匡三も慌てた。彼はつか／＼駆け寄つてうしろから老人を驚かした。

「まあ、お待ちなさい。一體、これは何ういふ譯ですか。」

不意に聲をかけられて老人は見返つた。さうして、穴のあくほどに匡三の顔をじつと睨みつけてゐた。

「わたくしは貞子の兄です。」と、匡三は正直に名乗つた。「妹に對してどう云ふ御詮議をなさるのか、どうぞ私にお話しく下さい。」

老人が何か云はうとする前に、貞子の方から先づ叫んだ。

「兄さん。構はずに置いて下さい。この問題は妾が自分で解決を付けますから。」

「いや、打捨つては置かれない。」と、匡三は再び老人の方に向つた。「失禮ですが、貴下は進藤君の親御さんか御親戚ぢやないんですか。」

相手の老人よりも、貞子は悸えたやうに兄の顔を吃と見た。それが又、匡三には不思議に感じられた。

(11)

老人は匡三の相手になることを好まないらしかつた。彼はわざとらしく顔を背けて黙つてゐた。

「私の云ふことがお判りになりませんか。」と、匡三は一足進み寄つて詰るやうに又訊いた。

「あなたとお話をする必要はない。」と、老人は冷かに答へた。

「でも、あなたが妹を苦しめてゐるのを、兄として見てゐる譯には行きません。」
 「苦しめる者が悪いか、苦しめられる者が悪いか。」と、老人はまた冷笑つた。「何しろあなたと私とは何の關係もない。あなたと須郷貞子と兄弟であらうが無からうがそんなことは何うでも可いのだ。」

「あなたの方では何うであらうと、私の方では……。」

「うるさい、うるさい。」と、老人は舌打した。「可、そんなら今日はこれで歸る。」

老人は縁から降りて泥だらけの下駄を穿いた。彼はそこに立つてゐる匡三には眼も呉れないで、貞子にむかつて嚇すやうに云つた。

「今日は歸つても、屹と又來るぞのこの二字國俊を忘れるな。」

短刀を懷中に收めて、彼は悠々と舊の裏口の方へ立去つた、貞子は口唇を固く噛みしめて、その行方を見送つてゐたが、やがて障子をびつしやり閉め切つて内へ入つてしまつた。匡三一人が縁先に取殘された。どう云ふ事情——何ういふ弱味があつて、貞子は彼の老人に脅かされるのか。匡三は切にその仔細を知りたかつたが、この際たとひ貞子を責めても、逆も要領を得られまいと察したので、彼は障子の内の妹に聲をかけないで自分も其のまゝ裏口へ出てしまつた。

歸る時に、匡三はお仙を呼び出して、裏口をしつかり閉めて置けと注意した。そ

れから表へ出て又立停つた。彼は暮れかゝる空を仰ぎながら少時考へてゐたが、結局足を早めて舊來た路を歸つて行つた。目白臺に住んでゐる芹澤家壽子を訪ねようと思つたのである。家壽子は今年二十四で、両親も兄弟もない孤獨の女で、小さい西洋洗濯屋の奥座敷を借りて、約ましかかな自炊生活を營んでゐるのであつた。

洗濯屋と米屋との間の狭い露地を入ると、左側に小さい木戸があつて、木戸をあけると四坪ほどの庭がある。その庭に向つた六疊の一間が家壽子の部屋であつた。

たびく訪ねて來て、勝手に能く知つてゐる匡三は、木戸の外から聲をかけた。

「芹澤さん。お家ですか。」

「はい。」と、内から優しい聲が聞えた。つゞいて庭下駄を突っかけて出て來るらしい足音が聞えた。

「私です。須郷です。」

「うらひや。」

家壽子は木戸をあけて、嫣然笑ひながら匡三を迎へた。家壽子は色の白い、やゝ下膨れの顔に細い眉を有つた、見るから温和やかな女であつた。

「今日は少し學校の方が遅くなりましたね。今歸つたばかりでございますの。」
彼女は匡三を内へ招じ入れて、小さい瀬戸火鉢に湯沸をかけた。

「好鹽梅に澤山も降りませんで……。随分お寒うございますわね。」

「陰つてゐますから又降るかも知れません。」

「さうでせうか。妾、意氣地がないもんで、近うところへ出ますにも、路が悪いと眞實に困るんでございますよ。」

細い眉を少し寄せて、家壽子は微笑んだ。

(三)

貞子と家壽子とは同じ學校に奉職してゐる關係から、たがひに親く交際してゐた、勿論貞子の方が位地が高いので、家壽子の方から何日も足を運んで、貞子の雜司ヶ谷の家をたづねてゐた。その中に彼女は貞子の兄とも心安くなつた。單に心安いと云ふのでなく、やがては二人が結婚すると云ふまでに、心と心が固く結び付けられてしまつた。貞子もそれを承知してゐた。

その家壽子を仇として貞子は執念ぶかく呪つてゐるのである。それに就いて、匡三には不満もあつた、多少の不安も忍んでゐた。彼が今こゝへ訪ねて來たのは、よそながら事實の真相を探り、場合に因つては家壽子に相當の注意を與へて置きたいとも思つたからであつた。併し眞正面からそれを云ひ出す譯にも行かないので、匡三はその話の端緒を見出すのに悩んでゐると、家壽子の方から口を切つた。

「あの、貞子さんは御加減がお悪いさうでございますね。」

「えゝ。」と匡三は曖昧に答へた。

「あなた、まだ御存知はございませんか。今朝ほど學校の方へは御病氣の御届がございましたので、妾これから鳥渡御見舞に出ようかと存じて居りましたところです」

「何、それほどのも事でもないでせうよ。」と、匡二は遮るやうに云つた。

「ほんの風邪でも引いた位のことです。」

「でも、平素からあんなに精勤家の貞子さんがお休みになるやうでは餘程お悪いんぢやないかと思つて、お案じ申して居りますの。」

家壽子の顔に一點の陰つた影も見えなかつた。彼女が雪子を誘ひ出して、貞子を陥れようと巧んでゐるなどは、何うしても想ひ及ばないことであつた。匡二は邪推ぶかい妹を淺ましく思つた。

「妾これから御見舞に出ようと思つて居るんですが、あなたも一緒にいらつしやしませんか。」と、家壽子は何にも知らないらしく誘つた。

「さや、止ませう。」

その聲が餘り卒氣なかつたので、家壽子は少し驚いたやうに匡二の顔を見た。それに氣がついて、彼は急に聲を和げた。

「實際、妹は大したことぢやありませんよ。風邪を引いたか、それともヒステリーにでも罹つたか。いや、ほんたうです。妹はこの頃少しスヒテリーの氣味ぢやないかと思はれることもあるんです。それですから自然あなた方に對して、何か失禮なことでも云ふやうな場合があるかも知れませんが、まあ大抵のことは我慢してゐてください。」

「須郷さんがヒステリーに……。」と家壽子はいよゝゝ驚いたやうに云つた。「そんな御様子は些とも見えませんわ。それは何かのお間違ひでせう。」

「あなた方にはまだお判りにならないかも知れませんが、私は確實に然うらしく認めてゐることがあるのです。」

「さうですか知ら。」と、家壽子はまだ不得心らしい顔をしてゐたが、やがて思ひ出

したやうに云つた。『さう仰しやれば、この頃は少し元氣が無くなつて、時々考へ事でもしてゐらつしやるやうな御様子が見えないでもありませんでしたが、眞逆ヒステリーでも……』

それを引奪るやうに匡三は忙はしく訊き返した。

「すると、妹は學校へ行つても何だか調子が變だつたのですね。」

「別に變と云ふ譯ぢやございませぬけれど……』

飛んだことを云つたと悔むやうな顔をして、家壽子はその話を曖昧の中に採消さうとした。

(四)

匡三は疊かけて訊いた。

「家壽子さん、妹のことに就いて、あなたに何かお心當りがあるならば、正直に話して下さいませんか。實は妹のことに就いて、わたしも少し心配してゐることがあるんです。御承知の通り、貞子と私とは二人だけの兄妹で、平素は遠慮なしに悪口なんぞ云つてゐますけれど、彼女のことには就いては私も陰では相當に心配してゐるんです。その妹が何だかヒステリーのやうな變な調子になつたとしたら、私だつて打捨つては置けません。ねえ、家壽子さん、お察しくださう。」

「お察し申します。」

とは云つたが、迷惑の色は彼女の顔にありくと現れてゐた。これには何かの秘密が潜んでゐるらしく思はれたので、匡三は飽までも窮追して其事實を白状させようぞ試みた。

「ねえ、家壽子さん。たとひ貴女がどんなことを口外なさうとも、私は決してそれを他人に洩すやうなことはしません。勿論、妹にも云ひません。何か妹に就いて

御存知のことがあるなら、どうぞ私にだけ教へて下さい。私がこれほど心配してゐるのが貴女にはお判りになりませんか。」

「よく判つて居ります。けれども……妾、別に何にも存じませんのですから。妾つまらないことを迂濶申上げて、あなたに御心配をかけて相済みません。」

「家壽子さん。あなた、そんな他人行儀の御挨拶で、この問題を有耶無耶に打消して了はうとなさるんですか。」

男の調子が少し改まつて聞えたので、家壽子はひどく慌てた。

「あら、あなた、そんな譯では……あなた、御腹をお立ちなすつては困りますわ。妾、決してそんな料見では……。」

「ぢやあ、正直に云つて下さい。くどくも云ふ通り、私は洒落や悪戯に他のアラを探るとか、他の秘密を計くとか云ふんぢやありません。唯つた一人の妹の身の上を心配して……。斯うしてあなたに頼んでゐるんぢやありませんか。どんなことで

も、あなたの知つてゐるだけの事を……。」

隙間なく責められて、家壽子もほくほく困り切つたらしかつた。彼女も既う絶命の破目になつて、幾たびか口籠りながら是れだけのことを云つた。

「何ですか存じませんけれど、進藤さんの阿父さんとか云ふ方が時々たづねてお出でになるやうです。學校の方へも二三度見えました。」

「進藤の阿父さん……。長い髻を生して、下り藤の紋附の羽織を着てゐる老人ぢやありませんか。」

「はあ。わたくしのところへ見えた時にも、下り藤の紋附の羽織を着てお來でございました。」

「あの老人、こゝへも來ましたか。」

匡三は驚いた。家壽子はそれぎり黙つてしまつた。

「こゝへ來て何んなことを云ひました。何しに來たんです。」と、匡三は不安らしく

又訊いた。

「あの……。進藤さんのとに就きまして……。いつまでも強情に動かないので、妾ほんたうに困りましたわ。終には短刀なんか出して……。」

老人はこゝへ來ても彼の塗鞆の二字國俊を振廻したらしい。匡三は彼に對する憎悪憤怒を抑へることが出来なくなつた。

「さうして、結局どうしました。」

「又來ると云つて歸りました。」

「進藤のことに就いて何を訊いたんです。」

家壽子はまた黙つてしまつた。

(五)

秘密の端緒がこゝまで開けた以上、匡三はもう家壽子の迷惑などを考へてゐられなくなつた。彼は單刀直入に訊いた。

「一體、貞子と進藤と何ういふ因縁があるんです。」

「存じません。」

「全く御存知ないんですか。で、進藤の父といふ人はあなたに何ういふことを訊かうとしたんです。」

「須郷さん。」

切端つまつて家壽子は泣出した。

「もうその以上に訊くのは勘忍してください。」

「さうですか。」

匡三は黙つて起たうとした。

「あなた、それでは妾が困るぢやありませんか。妾、もう何うしたら可いでせう。」

「唯正直に云つて下されば可いんです。」と、匡三はズポンの膝を叩しかけた。さうして、低聲で云つた。「妹は進藤と関係があるんぢやありませんか。」

「どうでございますか知りませんけれど……。進藤さんの阿父さんはそんなことを……。」と、家壽子はとうとう秘密を洩した。

匡三の額の上には深い皺が織込まれた。彼は頰れるやうに膝を落して又坐つた。

「それで進藤の老人は何うしよう云ふんです。あなたに何んなことを云ひました。」

「何でも須郷さんのところへ掛合に行つても、須郷さんはそんなことは知らない。跳ね付けてお了ひなすつたのださうで……。それで、今度はわたくしの所へ来て須郷貞子は自分の悴と関係があるに相違ない。お前は一つ學校に奉職して、平素から仲好くしてゐるから、屹と其の秘密を知つてゐるに相違ない。どうぞ正直に教へてくれ。さうして、この事件の證人になつてくれ……。妾、どんなに困つたで

せう。」と家壽子は泣聲を出して訴へるやうに云つた。

「さうして、その掛合の目的は……。何か貞子に金でも出せと云ふんでせうか。」

「縁を切つてくれと……。」

「縁を切つてくれ……。それを妹が承知しないんですね。」

「承知するにも、爲ないにも、そんなことは全然知らない、進藤といふ人とは一切無關係だと仰しやるんです。」

「何方が眞實でせう。」

「それは妾にも判りません。」

それは匡三にも判断が付かなかつた。併し今朝から進藤自身が雪を冒して、貞子のゆくへを探し歩いてゐたことを思ひ合せると、老人の認定の方が事實に近いらしくも想像された。進藤は栗田家の書生でまだ一定の職業もない。貞子よりは年も若い。この二人を組み合せると云ふことは、匡三も内心不賛成であつた。進藤の父も

おそろく同じ考へであらう。自分が兄として妹を思ふのも、彼が父として子を思ふのも、人情に差異はない。斯う思ふと、彼の老人に對する匡三の感情は頓に和いで來た。彼は寧ろ彼の老人を氣の毒にも思ふやうになつて來た。

それにしても、栗田家の令嬢雪子が突然に行衛不明になつたと云ふことは、この問題に何かの關係があるのか。彼は全然別種の出來事か。匡三はその解釋に再び頭を苦しめた。

(六)

貞子と進藤と進藤の父と、この三人を結び合せて考へてゐる中に、匡三の見當は大方決つた。この三人の人間がいづれも栗田家に關係のある以上、雪子の家出も何かこれに關聯した事情があるに相違ない。この三人の關係をもう一步進んで調査す

れば、雪子の隠れ家は自然に探し出されるに決つてゐると彼は思つた。

「家壽子さん。勘忍してください。私は決してあなたを残酷に苦しめようと思つて根掘り葉掘り詮議する譯ぢやないんです。あなたはまだ御承知ないかも知れませんが、妹の問題以外にもう一つこゝに事件が起つてゐるんです。栗田男爵の令嬢が昨夜から今朝までの間に行方不明になつたんです。」

「まあ、雪子さんが……。」と、家壽子は匡三の顔を少時見つめてゐた。

「まあ、何うなすつたんでせう。」

「それが判らないんです。妹が學校を今日休んだのも實は其爲でせう。」

「そんなら猶のこと、妾も見舞に伺はなければなりませんわ。」

「いや、妹はまだそれを秘密にしてゐるんですから、お見舞をうけては却つて困るだらうと思ひます。その事件で妹はいよゝゝ神経を昂ぶらせてゐるやうですから、かつかりお出でになると又色々の間違ひが起らないないとも限りませんし、旁々も

う少しお見合せ下さる方が可いでせう。」

匡三も流石にそれ以上を説明するに忍びなかつた。貞子に仇と呪はれてゐることを聞いたら、温和い家壽子はどんなに驚くことであらう。或はこれもヒステリーにでも罹るかも知れない。併し彼は更にこれだけの注意を與へた。

「今も云ふ通り、妹は何分ヒステリー氣味になつてゐますからね。すべての人を皆な仇のやうに疑つてゐるんです。あなただつて疑つてゐられないとは限りません。」

「まさか。」

「真逆とは思つても用心に如くはありません。あなた此頃に何か妹と衝突でもなすつたとがありますか。」

「いゝえ、何にも……。妾が須郷さんと衝突なんぞする筈がありませんわ。」

「さうでせう。私も然う信じてゐますが……。まあ、何しろ當分は妹のところへ近寄らない方が安全です。」

「さうでせうか。」

「まあ、兎も角も私の云ふことを肯いてください。で、警察沙汰にしたら早く判るでせうけれど、栗田家に迷惑をかけるのも氣の毒ですし、惹いては妹の迷惑にもなることです。私はいはこれから獨力で雪子さんの所在を探し出さうと思つてゐるんです。あなたも其積りで此一件は一切秘密を守つてゐて下さい。」

「あなた御一人で……。」と、家壽子は覺束なげに訊いた。

「あなたも御存知でせう。私の家に井倉といふ書生がゐます。彼奴は探偵小説ばかり読み耽つてゐて、いつも私に叱られてゐるんですが、斯ういふ場合には何かの役に立つかも知れません。あれと私と二人ぎり、この秘密を何とか探り出したいと思つてゐるんです。場合に因つたら、家壽子さん、あなたにもお願ひ申すことがあるかも知れませんが、その節はどうぞよろしく。」

「妾なんぞは逆もお役に立ちませんが……。さうして、これから何地へ……。」

「さあ、兎も角も栗田家へ行つて、その進藤といふ男に逢つて見ようと思つてゐるんです。その模様で更に今後の方針を立てなければなりません。」
 家壽子に別れて露地を出ると、外はすっかり暮れ切つしまつた。匡三は帽子を深くして雪融路を又歩き出した。

其四 妹の戀

(一)

「おゝ、井倉君。ちよいと来てくれ給へ。」

匡三は江戸川の家へ一日歸つて、ゆふ飯を喫つてしまふと、すぐに書生の井倉俊

吉を書齋兼坐敷の二階へ呼びあげた。

「井倉君。君に少し頼みたいことがあるんだが、一つ働いてくれまいか。」

栗田家の令嬢が家出のことや、進藤老人のことや、それ等の事情を一通り云ひ聞かせられて、井倉は眼を丸くして聽いてゐた。

「さう云ふ譯だから、僕はこれから栗田家へ行つて、進藤に逢つてそれとなく様子を探つて見る積りだ。實は妹と相談して捜査の方針を立てる積りであつたが、もう斯うなつちやあ妹なんぞは相手にならない。そこで、君を味方に頼まうと思ふんだが、どうだらう。」

「承知しました。私に出来ることならば何でも遣ります。」

ドイルやヒュームの探偵小説の愛讀者である井倉は、多大の興味を以てこの役目を引受けた。それから二人は額をあつめて、およそ三十分間ほど密談をつゞけて、匡三は再び家を出て行つた。今夜は暗い夜であつた。九段坂下で電車を降りて、こ

れから新宿行に乗換へようかと思ひながら、匡三はふと見ると、廣い往來の片側を忍ぶやうに辿つてゆく二人連の男があつた。店の瓦斯燈や電燈は雪調路に蒼色い光を投げて、その軒下を傳つてゆく二人の横顔をあざやかに照した。

男の一人は進藤老人であつた。それと肩を駢べて俯向勝に歩いて来る若い男は、確にその悴の進藤であつた。思ひがけなくこの二人の姿を見付けて、匡三の胸は跳つた。彼は電車の乗換を見合せて、窃と二人のあとを尾けた。

二人は坂のあがり口から横に切れて、牛ヶ淵の薄暗い公園に入つた。匡三も無論につゞいて行つた。まだ宵ではあるが、この公園に人のかげは見えないで、ところ／＼に消え残つた晝の雪が薄白い痕を止めてゐるだけであつた。二人は公園の奥へ入つて、濠端の堤に近いところに佇立んだ。匡三は大きい櫻の木のかげに身を寄せて、じつと聴耳を引立てゝゐたが、二人の聲は低いので其會話は一向に聴き取れなかつた。

匡三は少し焦れて来て、何とかして二人のそばへ近寄らうと燥つてゐる中に、老人の調子が急に高くなつた。

「馬鹿。お前のやうな不心得の奴は無い。俺があれば平素から云ひ聞かせてあるのに判らないか。須郷とかいふ女が何だ。お前よりも年上で、何だか傲慢な生意氣な女で、あんな女に關係つてゐたらお前は一生頭があがらないぞ。お前ばかりでない、この俺を何うしてくれる積りだ。あんな奴は思ひ切つてしまへ。俺は今日も須郷貞子に逢つて厳しく掛合つて来た、ぐづぐづ云へばもう叩き切つて了はうと思つてゐた。

それに對して、進藤は何とも返事をしなかつたが、彼が恐怖に慄えてゐるらしいのは、その頭のだん／＼に下つてゆくのを見ても察せられた。老人は聲を勵うして又云つた。

「可いか、よく覺えて置き。いくらお前達が強情を張つても、お前と須郷貞子とは

夫婦にすることは何うしてもならんぞ。お前の妻となるべき女は俺がちやんと決めてある。お前達があんまり強情だから、俺もよんどころなく最後の手段を用いたのだ。さあ、俺と一緒に来い。」

進藤は矢はり黙つてゐた。

「まだ判らないか。」と、老人は嚇すやうに云つた。「どうしても俺の云ふことを肯かないなら仕方がない。俺はこの短刀でお前を殺して、その足で雑司ヶ谷へ引返して須郷貞子を殺して了ふぞ。」

老人は又もや例の二字國俊を持出したらしかつた。

(一)

たとひ威嚇にしろ、自分の子を殺して併せて貞子を殺さうと云ふ進藤老人の決

心のおそろしいのに匡三もおどろかさされた。彼は呼吸を嚙んで其成行をうかゞつてあると、老人は悴の腕をマントの上から強く掴んだ。

「どうだ、まだ判らないか。お前は須郷貞子と一緒に死たいのか。親の手にかゝつて死たいのか。馬鹿な奴だ。よく考へて俺と一緒に来い。俺は決して悪いことは云はない。俺はお前のために貞子のやうに見えるから高慢な、姉ほども年の違ふ女でなく、もつと若い、もつと上品な、もつと美しい、もつと温和い娘を見立てゝ遣るのだ。それが何で不足だ。さあ、いつまでも世話を焼かせないで柔順に來い。俺は年を老つて氣が短くなつたのを知らないか。」

老人は腕を掴んで無理に引立てようとするらしかつたが、進藤は大地に釘付になつたやうで些とも身動きをしなかつた。

「可、どうしても肯かなければ仕方がない。」

彼は自然木の杖を投げ出したかと思ふと、掴んである我子の腕を一日突と放して

彼の短刀をきらりと抜き放した。その光を見て匡三はいよ／＼驚いた。彼は櫻のかげから飛び出して横合から老人の腕を捉へた。

「あぶない、まあお待ちなさい。」

老人は無言で振拂つたが、彼の力は非常に強かつた。匡三は足下の雪に靴を滑らせて、横倒しに投げ出された。その隙を見て進藤は兎のやうに突然駆け出した。老人はつゞいて追つて行つた。匡三がやう／＼這ひ起きる頃には、二人の姿は闇に呑まれてもう見えなかつた。

何かの参考になるかも知れないと思つたので、匡三はそこに落ちてゐる自然木の杖を拾はうとすると、その杖のそばに何か白い物の落ちてゐるのを發見した。手に取つて見ると、それは西洋紙の状袋に入れた手紙であつた。その手紙と杖とを拾つて匡三は公園の入口まで出て来て、電燈の光に照して能く見ると、状袋の上書は進藤政治様と記されて、その筆蹟は妹の貞子に相違ないことを匡三は一目見てすぐに

覺つた。今の捫着の間に、進藤の袂か懐中から落ちたものであらう。偶然の獲物を衣兜に收めて、匡三は自然木の杖にして坂の中途まで来た。

こゝで進藤に出逢つた以上は、もう栗田家へたづねてゆく必要はない。ことに老人に投げ出された爲に、服もコートも泥まぶれになつて了つたので、匡三はこの見苦しい姿で何時までも彷徨いてゐる譯にも行かなかつた。何を何うするにしても、一旦は家へ歸つて身體の始末をしなければならぬと思つたので、彼は泥だらけのコートを脱いで抱へて、再び坂下から江戸川行の電車に乗つた。

家へ歸ると、井倉はゐなかつた。奥から出て来た老婢のお島は主人の姿を見て驚いて訊いた。

「まあ、旦那様お轉びなすつたんですか。」

「む、自働車を避けようとして滑つたんだ。」と、匡三は好加減なことを云つて内へあがつた。兎も角も衣服を着替へて、二階の書齋へ入つて、彼は取あへず妹の手

紙を出して見た。

手紙は西洋紙の書翰箋にペンで細かく書いてあつた。それを讀んでゆく中に匡三の眉は漸次に蹙められた。

(三)

その手紙は貞子から進藤に宛てた一種の艶書であつた。併し然ういふ手紙にありふれた媚かしいやうな文句は一行も書いてなかつた。

あなたの阿父さんは何故わたくしを執念ぶかく憎むのか、それは妾にも判らないが、兎もかくもあなたの阿父さんが手を換へ、品を換へて、あなたと妾とを無理に引放さうと燥つてゐるのは事實である。あなたの阿父さんは色々の手段を以て妾を脅迫してゐる。芹澤家壽子さんを味方に引入れて、學校から妾を放逐させようとして試

みてゐる。併しそんな迫害は妾に對しては無効である。妾はどんな迫害を押退けても屹と最後の勝負をあげるものと、心の底では微笑んでゐる。あなたも何うか其積りで、どんな敵とも闘ふだけの準備と覺悟とを有つてゐてくれ。あなたの強い意志——それが妾に取つては唯一の力である。

貞子の手紙の意味は大略斯うであつた。それを讀んで、匡三はおのづと妹が哀れになつて來た。表面の理屈は兎も角も、妹も既う今年二十九の女である。教育家として社會的には何れほどの地位を占めてゐようとも、何れほどの尊敬を受けてゐようとも、女として又一種の寂寥を感じてゐたかも知れない。その妹が何ういふ動機がらか知らないが、ある若い男と戀に落ちた。而もその戀は男の親の不承知に因つて破壊されようとしてゐる。彼女が焦れて悶えてヒステリーに陥るのも無理はないかとも思はれた。

曩には彼の進藤老人に同情した匡三も、今度は妹にも同情しなければならなくな

つて来た。老人に味方して可いのか、妹に加勢して可いのか、匡三もその判断に迷った。實を云へば、進藤といふ男は何ういふ人物かよく知らないが、自分の見るところでは何うも妹とは不釣り合い。兄として普通の人情から云へば、もつと立派な人物を妹の夫に持たせて遣りたい。併し幾ら兄弟の間でも、これは兄の深く立入つて干渉すべき問題ではない。妹と進藤とが互に相愛の仲で、ことに妹がそれほど熱烈な戀に魂を焦してゐる以上、自分がそれを妨げるのは却つて人情に背いてゐる。自分は進藤老人の眞似をしたくない。自分は寧ろ進んで二人の戀を結び合せて遣らなければならぬ。匡三の分別は斯う決つた。

それに付けても、貞子が家壽子を呪つてゐるのは誤解である。家壽子が進藤老人と結托して貞子を放逐しようとする企てゝあるなどは、家壽子に取つて確實に冤罪である。自分はもう一度彼女に理解を加へて、家壽子の濡衣を乾さなければならぬ。さうして、家壽子と自分とが協力して、貞子と進藤との幸福を計らなければならぬ。

50

「俺はこれほどに思つてゐるんだが……。」と、匡三は再びその手紙を見つめた。その途端に、階段を急いで登つて来る足音が聞えた。

「先生。」

それは井倉であつた。匡三は手紙を押遣つて向き直つた。

「どうした。大變に早かつたぢやないかい。」

「貞子さんはあなたがお歸りになると、直にあとから出たさうです。勿論、あの家の近所にうろついてゐて、出入の人間を注意してゐる積りだつたのですが、貞子さんが出て行つたのは何か譯がありさうに思はれましたから、それで引返して報告に来たのです。何でもあなたがお歸りになると、何處からか一通の郵便が来て、貞子さんはそれを見ると慌てゝ出て行つたのださうです。」

(四)

「妹が出て行つた……。」と、匡三は首を拵つた。「さうして、どこへ行つたか判らないだね。」

「判りません。」と、井倉は面目無ささうに答へた。「わたくしはお清といふ女中をつかまへて訊いたのですが、一體寡言の女ですから、詳しいことを云はないのです。併し何處からか舞ひ込んだ手紙を見て、貞子さんがすぐに出て行つただけは間違ひのない事實です。」

その手紙は進藤から来たのではないかと匡三は想像した。さうして、平素からドイルを鞆呑にしてゐるやうな顔をしてゐながら、なせ其場合に貞子を尾行しなかつたのかと、彼は井倉の不注意を齒痒く思つた。その不満足らしい顔色をうかゞひな

がら、井倉は遠慮勝に訊いた。

「先生。これから何うしませう。」

「君はもう一度雑司ヶ谷へ行つてくれ。さうして、妹が何時頃歸つて来るか、或は歸つて来ないか。氣をつけて見張つてゐてくれたまへ。一日歸つて来ても又すぐに出て行くやうならば、無論にあとを尾けるんだよ。シヤアロツク・ホルムス、しつかり頼むよ。」

無論にといふ詞に力を入れて、匡三は暗に彼の不用意を責るやうに云つたので、井倉はひどく恐縮したらしかつた。彼はその失敗の耻を雪ぐべく誓うやうに、たしかに受合つて再び出て行つた。

午からのべつに駆け歩いたので匡三も流石に疲れた。書棚の上の置時計を見ると今夜も既う八時を過ぎてゐた。栗田の邸をたづねても進藤は居ないに相違ない、貞子の行く先は判らない。差當りは何うにも手の着様がないので、匡三も机に倚りか

かつたまゝで、再び妹の手紙を眺めてゐると、老婢のお島があがつて来た。

「旦那様。お茶をあげますか。」

「むゝ。紅茶を拵へてくれ。」

「今晚またお出掛になりますか。」

「さあ。まだ判らないが、多分今夜はもう出ないだらう。」

「雪が又降つてまゐりました。」

「降つて来たか。」と、匡三は手を伸ばして障子をあけて、硝子戸越しに暗い夜の空を仰いだ。

「井倉は困るだらうな。」

「井倉さんは何だか大變な用があるんだと云つて、おそろしい權幕で出ておいでした。」

「さうかも知れない。」と、匡三は苦笑した。彼奴、思ひの外ぼんやりしてゐるか

らう。」

「おや、何人か。」

お島は耳を引立てた。入口の格子が徐にあいたらしかつた。井倉が歸るにはまだ早い。もしや貞子かと匡三の胸は跳つた。お島はすぐに下へ降りて行つたが。又引返して来て低聲で取次いだ。

「あの、進藤さんといふ方が……………」

「老人か。」と、匡三は膝を立直して口早に訊いた。

「……………」若く方で……………。晝間も一度お出になりました。」

「すぐに通してくれ。」

やがて進藤政治の姿が匡三の眼の前にあらはれた。彼は寒さに顫へてゐるやうに身を疎めて、主人が押遣つた火鉢の前に危坐つた。彼の顔色は眞蒼であつた。

「やあ、先刻は失禮。」と、匡三は努めて落付いて挨拶した。「また降り出したやうで

すね。」

「少し降つて来ました。」

進藤の眉毛には雪の一片が白く光つてゐた。彼はそれを拂はうもしないで、黙つて顫へてゐた。

「あなたは寒いんぢやありませんか。」

「はい。」

だん／＼訊いて見ると、彼は可哀さうに午飯も夕飯もまだ喫はないのであつた。

匡三はおどろいた。

(五)

進藤はあさ飯を喫つたぎり、今頃まで方々をさまよひ歩いてゐたのである。匡

三はその事情を詮議する前に、先づ老婢を呼んで取あへず彼に熱い紅茶を飲ませた。それから有合の物で飯を喫はせて遣つた。碌々に遠慮もしないで、進藤は飲んで喫つて、やう／＼少し人間らしい顔色になつた。

火鉢には炭火が熾に起つてゐる。進藤はそれに手をかざしてほつと呼吸をついた。彼は貰も有つてゐないらしいので、匡三は巻蕘の箱を出して彼の前に置いた。

「色々御厄介になつて實に相済みません。」と、進藤は初めて口を利いた。

「突然だから何にも御馳走がない。」と、匡三は笑つた。「どうです、今夜は泊つて行きませんか。」

「泊めて下さいますか。」

「無論に泊めてあげます。」

進藤は行きどころに困つてゐるのだと匡三は推量した。彼が旨さうに一本の蕘を喫つて了ふのを待つて、匡三は徐ろに訊いた。

「進藤さん。あなたは今夜私のところへ泊めて貰ひに来たんですか。それとも他に何か御用があつて来たんですか。」

彼は黙つて俯向いてゐた。匡三は疊かけて訊いた。

「どつちにしても、あなたが今夜たづねて来て下すつたのは非常に好都合でした。實はわたくしは今夜あなたのところへ伺はうかと思つて、途中まで出かけたんですが……。」

進藤は眼をあげて相手の顔を鳥渡視したが、すぐに又うつむいて了つた。さうして低い聲で云つた。

「牛ヶ淵でお目にかゝつたのは貴下でせう。」

「さうです。」と、匡三は首肯いた。

「あの老人はあなたの阿父さんですね。」

「はう。」

「進藤さん。わたくしは其場所であんなものを拾つたんです。」と、匡三は貞子の手紙を進藤の前に置いた。

「これはあなたが落して行つたんでせう。」

少し悸えたやうな眼をして、進藤はその手紙を偷み視た。

「あなたと妹との關係はこれで悉皆判りました。あなた方の間に斯ういふ事情が纏綿してゐると云ふことは、私も今まで此とも知りませんでした。そこで進藤さん。もう斯うなつたら御互に何も彼も打明けて御相談しようぢやありませんか。私はあなたの阿父さんは少し違ひます。あなたが眞實に妹を愛し、妹が眞實にあなたを愛してゐる以上、わたくしは決してその二人の戀を破壊しようなど云ふそんな残酷なことをしたくない。私は飽までもあなた方の味方になつて、二人の戀を圓滿に成就させたいと思つてゐます。え、判りましたか。就ては何うぞ私を信用して、あなた方の秘密——若し何等かの秘密があるならば——それを残らず打明けて頂きた

い。さうして、おたがひに十分に協議して、今後の方針を決めようぢやありませんか。』

『ありがたうございます。』

『いや、これはあなたの爲ばかりでない。私は妹の爲をも考へて、斯うして心配してゐるんですから、改めてお禮には及びません。で、先づ伺ひたいのは、あなたの阿父さんといふ人ですね。あの人は何故あなたや妹を追廻してゐるんでせう。單にあなた方二人の關係を打切らうと云ふだけのことでですか。それとも他に何か理由があるんですか。』

何か云はうとして進藤は顔をあげたが、又氣怯れがしたやうに其眼を伏せてしまつた。

其五 進藤老人

(一)

進藤老人は何者であるか、どういふ性質の人間であるか、それを詳しく呑込んで置かなければ、今後の方針が立てられない。匡三は切にそれを知りたかつた。もう一つには、進藤が何の目的で自分のところへ駈込んで來たのか。それも詳しく訊きたかつた。彼は根堀り葉堀り執念ぶかく詮議して、進藤の口からどうくこれだけのことを白状させた。

彼の父は進藤政勝と云つて、維新前は西國の某藩士であつた。彼が現在寄留して

ある栗田男爵家の先代の主人も矢はり同藩士で、其の當時は進藤よりも家格が下つてゐた。彼は自分の生れない昔のことであるから、詳しい事情を勿論知らないが、何でも維新前後の混乱の際に、栗田の父といふ人は何かの不正を働いて、それが表向きになると、その藩の掟として、家は斷絶、彼は縛り首の仕置にならなければならぬ破目に陥つた。

その際、彼に同情したのは進藤政勝であつた。彼の罪は到底逃るゝ術はない、彼は死んでその罪を償はなければならぬ。併しその家を斷絶して、何にも知らない妻子までを路頭に迷はせるのは餘りに不憫である。斯う思つて、政勝はある夜ひそかに栗田の父を自宅へ呼び寄せて、これが表向きにならない中に早く切腹しろと勸告した。本人のお前さへ自滅して了へば、あとは自分が引受けて、必ず栗田の家の絶えないやうに取計らつて遣る。どの道、お前は助からない人間であるから、罪科に逢つて縛り首の耻を見るよりも、寧ろ尋常に切腹して、切ては家名の斷絶を逃れ

る方が優しではないかと吳々も云ひ聞かせた。

栗田の父もその厚意を感謝して歸つた。彼はその曉に立派に切腹してしまつた。彼の罪状はもう殆ど公然の秘密で、彼の自滅がそれに原因してゐること概一番の認める所であつたが、それでもまだ表向きの沙汰にならない中に死んで了つたので、彼の家には疵が付かずに濟んだ。勿論それは進藤政勝が情の計らひで、色々に取締つてくれた爲めでもあつた。

栗田は斯うした最期を遂げて了つたが、その倅は非常に俊才であつた。彼は明治の初年に藩から選ばれて東京へ留學することになつた。それからだんくんに成功して、實業界では屈指の大立物になつた。彼は新華族の一人になつた。

それと反對に、進藤政勝は廢藩の後に零落れてしまつた。一時は地方の官吏などを勤めたこともあつたが、それも思はしくないので又上京して來た。併し栗田の家に取つては、進藤は昔の恩人である。その當時、栗田の家を取潰されて、妻子が他國

に流寓の悲運に陥つたらば、いかに俊才の俸でもこれほどの出世は出来なかつたかも知れない。それは栗田家でも承知してゐるので、男爵は進藤政勝に對してこれまでも随分の面倒を見て遣つた。彼は政勝の負債を償つて遣つたこともある。彼は政勝が或事業を興す時に何萬圓といふ資金を融通して遣つたこともある。而も政勝はその事業にも失敗した、新しい負債をも作つた。さうして、絶えず栗田家に迷惑を持込んでゐるのである。

「父にも實に困るんです。まだそればかりぢやありません。」

進藤は父の非をあばくに堪へないやうに、苦しげな嘆息を洩した。

(一)

栗田男爵家と進藤老人との關係もこれで大抵判つた。老人が昔の恩を高に被て、

栗田家に迷惑をかけてゐる事情も判つた。併し進藤の話はまだ盡きないらしいので、匡三は耳を澄して聽いてゐた。

彼の話によると、父の政勝は當時無職業である、色々の事業に失敗して、自暴酒に肺腸を爛らせて了つた彼は、殆ど居所も定まつてゐない一個の老壯士になつて、昔の知人を困らせて歩いてゐるらしい。その中でも最も迷惑を蒙つてゐるのは彼の栗田家で、いくら昔の恩人でも、際限も無い度々の無心にはほこく愛想を竭して了つた。ことに昔の事情を能くも知らない栗田夫人などは、彼のあまりに横柄なのを憎んだ。

同じ無心でも温和と頼んで來るならば未矣のこと、この老人は正面の玄關から大手を振つて上り込んで來るのである。さうして、動もすると遠い昔のことを云ひ出して、こゝの家の身上は皆な俺の物だと云ふやうな顔をする。それが度重るに連れて、夫人ばかりでなく、主人の男爵も漸次に彼を厭ふやうになつた。彼は栗田家の

執事や書生等にまで蝮のやうに思み嫌はれるやうになつた。

斯うした父を有つた進藤政治は決して幸福ではなかつた。父の縁故で十七八の頃から栗田家に引取られて、書生同様に養はれてゐたが、何分にも父が然ういふ始末なので、彼は兩方の間に立つて何日も苦しい思ひをしなければならなかつた。それでも彼は父と打つて變つて、至つて温和い柔順な質であるので、父に對する憎惡は彼の上になで懸つて來なかつた。彼は主人夫婦にも可愛がられてゐた。悪い親を有つて氣の毒な人だと、邸内の人達にも寧ろ同情されてゐた。

それを附目にして、進藤老人は一種の陰謀をめぐらしたのである。彼は栗田家の一人娘の雪子に倅の政治を押し付けて、結局この家を乗取らうと巧んでゐるのであつた。

「すると、阿父さんはあなたと妹との關係を知らなかつたんですね。」と匡三は意外の話におどろきながら訊いた。

「無論知らなかつたんです。」と、進藤は答へた。「それを知つて非常に怒りました。さうして、すぐに貞子さんと手を切つてしまへと云ふんです。併し……。」

「あなたが、承知しなかつた。」と、匡三は引取るやうに云つた。「そこで、阿父さんは何とかして二人の仲を割かうとしてゐる。どうしても肯かなければ、二字國俊の短刀とかで殺してしまふとか云つてゐる。その脅迫を恐れて、あなたも妹も心配してゐる。先づ然ういふ譯なんです。」

「そればかりぢやありません。父はどうく非常手段を取つたんです。」

「非常手段……。」

「雪子さんを何處へか隠して了つたんです。」

「あなたの阿父さんが……。」と、匡三は眼を輝かせた。「さうして何うする積りなんでしょうか。」

「恐く雪子さんを脅迫して、無理に私と……。」父は然ういふ料見らしいんです。

「それにしても、雪子さんを何うして連れ出したんでせう。」

「それは私にも話しませんでした。」

「何處に隠してあるんでせう。」

「それもまだ話しません。」

(三)

「すると、あなたは今夜その事を私に報せに来て下さったんですね。」と匡三は徐に云った。

「さうです。この二三日、わたくしは絶えず父に追ひ廻されてゐるんです。もう栗田家にも居堪まれないので、貞子さんと相談して……………」

「妹と相談して……………」

進藤は急に口を噤んで了つた。

あなた方も何處へか隠れる積りなんですか。と、匡三は苦笑ひした。

晝間あなたにお目にかゝつたときには、わたくしもまだ雪子さんのことを何にも知らなかつたんですが、途中で父に逢つて、父が雪子さんを連れ出したことを初めて聴かされたんです。私も既う何うして好いか判りません。貞子さんに逢ひたいと思つても、いつも懸違つて逢ふことは出来ず、雪子さんのことが不安心でもあり、寧ろあなたに何にも彼もお話をして、何とか救つて頂きたいと思ひまして、それで斯うして伺ひましたので……………」

途方に暮れ果てた自分の身體を、戀人の兄の前に投げ出して、進藤はその救ひを頼まうとするのであつた。匡三も彼の苦しい立場に同情した。

「よく何も彼も云つて下さつた。よく来て下さつた。私はあなたに對して、自分を信用してくれと云ひました。それと同時に、私もあなたを信用します。あなたの心

に陰翳のないことは能く判りました。」と、匡三は彼を慰めるやうに云つた。「併しも
う斯うなれば難しいことはありません。そこで、あなたに訊いて置きたいのは、あ
なたは阿父さんの考へてゐること、又現在試みつゝあること、それを無論に善い事
とは思つてゐないでせうね。」

「それですから困つてゐるんです。」と進藤は臆病らしく眼をしばたゝいた。

「困ることはありません。この上はおたがひに勇氣が必要ですよ。あなたは阿父さん
の計略の裏を搔いて、雪子さんを救ひ出すだけの勇氣と決心とがありますか。」

「この場合ですから、わたくしも自分に出來るだけのことをしたいと考へてゐます。
栗田家でそれを知つたら何んなに驚くでせう。奥さんが何んなに心配するでせう。
それを思ふと、わたくしは逆も邸へ歸る氣にはなれません。」

「それですから、栗田家へ聞えない中に、一日も早く雪子さんを取返す工夫が肝腎
ですよ。あなたと私とが一致して遣れば屹と出來ます。」

「さうでせうか。」

「阿父さんの居所は定まつてゐないんですね。」

「併し大抵は察してゐます。父はこの頃目白の方にあるらしいんです。」

「目白………。下宿でもしてゐるんですか。」と、匡三は訊いた。

「間借だらうと思ひます。何でも西洋洗濯屋の向ふ横町の横田と云ふ家ださうです」

匡三は驚いた。燈臺下暗しとかいふ類で、進藤老人は彼の芹澤家壽子と、つい眼
と鼻との間に鼻を作つてゐるのであつた。自暴自棄に陥つてゐる彼の老人は、家壽
子に對しても重ねて何んな難題を持掛けるかも知れない。どんな脅迫や暴行を加へ
るかも知れない。もう一日どころか、一刻も猶豫は出來ないやうに、彼の心は俄に
奇立たれた。

(四)

匡三は跳上るやうに起ち上つた。

「ぢやあ、これからすぐに其の目白へ行きませう。」

「目白へ………。父にお逢ひになるんですか。」と、進藤は不安らしく見あげた。

「結局逢ふことになるかも知れませんが、最初に逢ふのはあなたの役です。あなたは阿父さんに逢つて、雪子さんに逢はしてくれと云ふんです。いや、大丈夫です。つまり貴下が料見を入替へて、阿父さんの云ふことを肯くと云へば可いんです。おそらく雪子さんは他に隠してあるんでせうから、阿父さんはあなたを信用して、その隠れ家へ案内するに相違ありません。よござんすか、阿父さんが信用するやうに巧く話し込まなければ不可ませんよ。で、阿父さんがあなたを案内して行く——わ

たくしが其後を尾けて行く——それから先は臨機應變です。」

「判りました。」

「あなたに巧く遣れますか。」

「さあ。」と、進藤は餘ほど難儀らしい顔をしてゐたが、結局思ひ切つて巧く遣ると誓つた。

匡三は下へ降りて再び洋服に着替へようとする、老婢は吃驚したやうに訊いた。

「又お出かけてございますか。雪がだんく強くなつてまゐりました。」

「むい。今夜は歸らないかも知れない。井倉が歸つたら然う云つてくれ。」

匡三は洋服にゲートルを着けて、身輕に扮装つた。彼れは出がけに玄關にある彼の自然木の太いステッキを見かへつて、持つて出ようかと考へたが、邪魔になるので止めた。彼はレインコートと頭巾をかぶつて出た。進藤も傘は要らないと斷つてマントに包まつて一緒に出た。

雪は老婢に嚇されたほどに強くも降つてもゐなかつた。この位ならば何でもないと、二人はすぐに往來へ出て、江戸川行の電車に乗つた。電車の中には三四人の客が乗つてゐた。匡三も進藤も黙つて俯向いてゐたが、その中に匡三はふと考へた。「雪子を誘ひ出したのは進藤政勝一人の仕業か知ら。」

たとひ嚴重な用心がしてないにしろ、夜中に他人の家へ忍び入つて、そばに寝てゐる朋輩にすらも心附かれないやうに雪子を奪ひ出すといふのは容易でない。雪子も既う十六の娘で、まんざらの小兒ではない。それが安々と奪ひ出された云ふからには、家の内にも進藤の味方がないとも限らない。匡三は胸の中でその心當りをだん／＼に數へたが、まさか他に女生徒達が進藤老人に協力して、そんな悪事を巧らまうとも思はれない。強て疑へばお仙とお清と云ふ二人の女中であるが、彼等とても彼の老人の味方になつて、主人の貞子に難儀をかけようとも思はれない。斯う考へると、匡三は矢張り何の手がかりをも見出すことが出来なかつた。

「もしや貞子自身が隠したんぢやないか。」

こゝまで考へつめて來て、匡三も我ながら可笑くなつた。俺も井倉にかぶれて、ドイルを鶉呑にしたやうな苦しい智慧を絞り出したものだと、彼は自分で自分を嘲り笑つた。進藤は勿論そんなことを考へてゐよう筈がない、唯うつむいて自分の足駄の爪皮の雪を眺めてゐた。

電車を降りた頃には、一旦融けかかった晝の泥濘の上に、また薄白い雪を敷いてゐた。

其六 夢か實か

(一)

二人が薄い雪を踏んで目白の臺へ登り着いたのは、もう十一時に近い頃であった。進藤は途中で卷賣のバットを買った。

「あなたは阿父さんの家を知つてゐるんですか。」と、匡三はこゝらと思ふあたりに立停つて訊いた。

進藤は知らないと答へた。自分は父の話に聞いたばかりで、一度もたづねて来たことはないと言つた。西洋洗濯屋の近所と云へば、大抵この邊であらうと思つたが、當の相手を探す前に、匡三は家壽子のことが氣にかゝつてならなかつた。彼は先づ家壽子をたづねて其模様を見とゞけ、併せて今後の注意をあたへて置きたいと思つた。

「私ちよいと此の露地の中に用がありますから、あなた少しくゝに待つてゐて呉れませんか。すぐに行つて來ます。」

「はう。」と、進藤は柔順に承知して、洗濯屋の軒下に立つてゐた。

匡三は急いで露地へ入つた。木戸は勿論閉めてあるのを幾たびか叩いて、やうやうに家壽子が出て來た。

「たびたび御邪魔に出ます。」と、匡三は少し白くなつた頭巾を被つたままで會釋した。「いゝえ、もうこゝで可いんです。唯あなたに鳥渡申上げれば宜しいんですから。」

「何うぞ御遠慮なく……。實はわたくしも少しお耳に入れたいことがございますから。」

それは進藤老人のことであらうと匡三はすぐに推量した。さうなると、彼は聞捨にもならないので、案内されるまゝに庭から内へ通ると、家壽子はまだ寢床へも入らないで、机にむかつて何か勉強してゐたらしかつた。

「遅くまで御勉強ですわね。」

「いゝえ、何にも出來ませんから、今の中に些と勉強して置きませんでは……。」

今の中に——その一句が匡三の身には意味ありげに響いた。彼は思はず微笑を禁め得なかつた。」

「あんまり勉強して身體を痛めると不可ませんよ。」

「それほど勉強すれば宜しいんですけれど……。」と、家壽子も嫣然に笑つた。

これが平素の場合ならば、二人に取つて楽しい夢の世界に相違なかつたが、今夜は何方も落付いてゐられなかつた。二人ともに早く話さなければならぬ大事の用を抱へてゐるので、長くその夢の世界に浸つてゐることを許されなかつた。匡三は先づ女の話を取かうとした。

「そこで、私へのお話と云ふのは何ういふことですか。」

「實は……。あなたが御注意下さつたのでございますけれど、妾どうも氣にかゝつてならないもんですから。」と、家壽子は云譯がましく云つた。「まことに濟みませんでしたけれど、先程鳥渡あちらへ伺ひましたので……。」

「妹のところへ……。」

「はい。何にも知らない積りで、唯窃と御様子を見てまゐらうと存じまして……。」

家壽子のたづねて行つたことを井倉は何にも報告しなかつた。恐く井倉が一日歸つて來たあとへ、家壽子が行き違ひに出向いたものであらうと匡三は考へた。

「妹はゐましたか。」

「いゝえ。それに付きまして……。」

云はうか云ふまいかと、家壽子は今更になつて迷つてゐるらしかつた。匡三は相手の顔を見つめながら、黙つてあとの句の出るのを待受けてゐると、その鋭い瞳の光を避けるやうに、家壽子は臆病らしく俯向いてしまつた。

「妹はゐなかつたんですね。」と、匡三は待兼ねて訊いた。「それから何うしました。」

「それで、あの……。」

「ほかに誰か來てゐたんですか。」

(II)

「私が斯うしてたび／＼出ましたのも、矢はり妹に關聯した問題なんです。」と、匡三は堪切れなくなつて云つた。「就いては、あなたも妹の一身上に關して、何か新しくお聞込にでもなつたことがあるなら、どうか御遠慮なく話して頂きたいもんですが……。妹の留守へお出になつて、それから何うしました。」

促すやうに迫り問はれて、家壽子も既う躊躇してゐられなくなつたらしい、思ひ切つてこんなことを云ひ出した。

「妾よもやとは存じて居るんですけれど……。あんまり思ひも付かないことでございますから、まさかにそんな事が……。」

前提が長いので、匡三はいよ／＼焦つたくなつた。

「それで妹がどうしたんです。」

「これは唯あなたのお耳に入れて置きますだけのことでございますから、この場かざりで何うかお聞き流しを……。もし間違つたら大變でございますから。」

「判りましたよ。それで何うしたんです。」

「あんまり思ひも付かないことで、そんなことの有りさうな筈がないんですけれども……。」

「まあ、そんなことは何うでも可ござんすから、早くその本文を話してください。」

「ですけれども、あんまり不思議でございますから……。」

匡三は少し疝癢が起つて來た。

「家壽子さん。冗談ぢやない、他を焦らして面白いんですか。早く話してください。一體それは何ういふ事なんです。」

「あの、實は先ほど雑司ヶ谷のお宅へうかゞひますと、貞子さんはお留守でございました。妾それですぐに歸れば宜しいんでしたか……生徒の方達に逢つて、どんな様子か訊いて見ようと存じまして、寄宿舎のお部屋の方へまゐりますと、皆さんが一つところに寄集つて、丁度あの雪子さんの噂をしてゐるところでございました。」

「成ほど。」

「學校へ行つても誰にも話してはならないと、先生から堅く口止をされてゐるけれども、雪子さんは一體どうしたんだらう、もし此のまゝ歸つて來なかつたら何うしよう云つて、皆さんも涙ぐんで心配してゐらつしやるんです。妾もそこで些さばかりお話をして、それからそれを出てまゐりますと、あとから南條さんが窃と従いて來て……。」

「南條さんといふのは誰です。」

「南條登美子さんと云つて、雪子さんと同じお部屋にゐる方です。今年たしか十七

才……。」

「さうですか。さうして……。」

「縁側のところで妾の袖を引張つて、小さい聲で……、あの、先生だから申し上げますが、栗田さんは須郷先生が何處へか連れて行つたので……。」

「え。須郷先生が……。貞子が連れ出したと云ふんですか。」

「匡三は相手の顔を屹と視た。家壽子はつゞけて云つた。」

「南條さんは然う云ふんです。妾もあんまり夢のやうで……。でも、南條さんは寝た振をしてゐて、たしかに見たと斯う云ふんです。尤も南條さんも最初はほんたうに寝てゐたんですが、眼を醒まして見ると、須郷先生が栗田さんに衣服を着替へさせて、窃と手をひいてお部屋の外へ連れ出したと……。いゝえ、夢ぢやあない確實に見とゞけたと云ふんですが……。南條さんは年が若くても、なか／＼確固した氣性の方ですから、よもや間違ひでもなからうかとも思ふんですが……。」

あ、何うしたことでせうか。」

呆氣あつげに取られて匡三たけぞうは唯黙ただまつて聽きいてゐた。

「勿論、わたくしが見た譯わけでもございませぬのですから……。」と、家壽子やすすこはすぐに云いひ足たした。『たゞ南條登美子なんじょうとうみこさんの話はなしをお取次とりつぎいたすだけのことで……。」ですけれども、妾めかけには何うしても眞實ほんとうとは思おもはれませぬの。」

(三)

斯かうなると、夢ゆめか實まことか、匡三たけぞうにも見當けんたうが付つかなくなつて來た。彼は先刻電車さつぎでんしやの中で不圖考ふとごへたことを又思またおもひ出した。

「もしや貞子さだこ自身が隠かくしたんぢやないか知ら。」

それはあながちに小説的せうせつてきの空想くうさうではなかつたらしい。その事實は現いまに眼まへの前まへにあ

らはれて來たではないか。併し貞子さだこがどう云ふ目的りやくてきで、そんな不思議なことを企くわだめたのか。匡三たけぞうはその理由りゆうを想像さうぞうするのに又苦くるしみしめられた。

「妾めかけも何なんと返事へんじをして可かいか判わからないもんですから。」と、家壽子やすすこ餘よほど困こまつたらしい顔かほをして話はなした。

「兎うさぎにかくに其そのんなことを誰たれにも云いつちや不可いけませんと、南條なんじょうさんに口止くちどめをして歸かへつて參まかりましたんですが……。」

「いや、有難ありがたうございしました。」と、匡三たけぞうは嘆息ためいきまじりで會釋かいしゃくした。『實際じつざい、私も夢ゆめの様ようで、どう云ふ理屈りくつなんだか見當けんたうが付きませんが、或あるひはそれが事實じじつかも知れませぬ。』

「さうでございませうか。」

「で、いよくそれが事實じじつであるとすれば、私もまた搜索さうさくの方針ほうしんを變かへなければならませぬ。」

貞子さだこ自身が雪子ゆきこを連れ出したとすれば、彼女かみと進藤老人しんどうらじんとは同腹どうふくでなければなら

ない。妹と彼とは一種の仇同士であるやうに、匡三は今まで解釋してゐたが、その考慮は土臺から引くり返されて了つた。貞子は却つて進藤老人の味方である。夢か實か、匡三はもう一度考へた。

『併し何う考へても不思議です。』と、彼は首をかしげた。『貞子は自分で雪子さんを隠して置いて、自分で大騒ぎをして探し歩いてゐる。何が何だか些とも判りませんよ。』

『もし、それが眞實なら、何か餘程複雑つた事情がお有りなさるんでございませうね。』と、家壽子も眉を寄せた。

『そりや無論でせう。左もなければ、そんな狂氣染たことを……。いくら妹のヒステリーが嵩じたと云つても……。』

その詞の切れない中に、庭口の木戸の明く音が聞えた。二人は眼を見合せた。匡三はすぐに起つて縁側に出ると、噂の主人貞子が幽霊のやうにすうと入つて來た。

『貞子か。』と、匡三は少し意外に思ったが、彼女が丁度こゝへ來合せたのは好都合だとも考へた。

『須郷さんでございますか。』と家壽子も驚いたやうに出て來た。

貞子は黙つて縁先に突つ立つてゐた。

『まあ、おあがんなさいまし。』

『まあ、此方へお入りよ。』と、匡三も聲をかけたが、貞子は矢はり直には返事をしなかつた。彼女は雨戸を一枚あけてある縁側の端に腰を卸した。

内から洩れる電燈の光に照された貞子の顔は凄愴いほご蒼かつた。鹿髪は〇り毀したやうに掻き亂されて、その凄愴い顔の上に掩ひかゝつてゐた。彼女はコートも着てゐないで、銘仙の羽織が肩から半分滑り落ちさうになつてゐた。

『どうしたんだ。今頃どうして來たんだ。』と、匡三も流石に不安になつて、勦るやうに進寄つて訊いた。

「兄さん。」と、貞子は肩で呼吸をしながら云つた。「妾、一度あなたにお目にかゝりたいと思つて……。」

「こゝにゐることを何うして知つてゐた。」

貞子はそれに答へなかつたが、多分そこで進藤に逢つたのであらうと、匡三はすぐに覺つた。

「何しろ、こゝは寒い。まあ内へおあがりよ。」

「どうぞ此方へ……。ほんたうにそこはお寒うございますから。」と、家壽子は摺寄つて勤めたが、貞子は唯會釋したばかりで矢はり動かなかつた。

庭の雪は夜目にも薄白く見えて、針を含んだやうな夜更の風が三人の襟に泌みた。

(四)

「兄さん。濟みません。どうぞ勘忍してください。」

貞子は縁側に俯伏して、さめぐと泣き出した。匡三は彼女の肩に手をかけて、兎もかくも内へ連れ込もうとしたが、貞子は肩を揺ぶつて肯かなかつた。

「勘忍して下さい、勘忍してください。」と、彼女は噉りあげて泣きつゞけてゐた。

「誰も叱りやしない。一體どうしたと云ふんだ。」

「妾、兄さんには大變お世話になりました。濟みません、濟みません。死んだ阿父さんにも阿母さんにも……。世間の人達にも……。濟みません、濟みません。」

匡三と家壽子とは再び眼を見合せた。しどけない姿で其處に泣き顔ほれてゐる貞子の襟もとを、家壽子 悼まじげに眺めてゐると、貞子は涙を浴びたやうな顔をあげて云つた。

「芹澤さん、家壽子さん。あなた、兄さんと何日までも仲好くしてください。兄さん、家壽子さんを可愛がつてあげて下さい。」

何だか遺言めいたことを云ふので、匡三はいよ／＼不安になつた。彼は諭すやうに物柔かに云つた。

「一體お前は何ういふ事情や心配があつて、今頃斯うしてうろ付いてゐるんだ。云ふまでもないが、お前と私とは兄妹だ。どんなことでも遠慮なく云ふが可いぢやないか。私は屹とお前を救つて遣る。」

「兄さんの力でも、誰の力でも、もう妾を救ふことは出来ません。妾は……妾は……。」と、貞子は遺瀨ないやうに身を顛はせて泣いた。

「進藤と夫婦になれないとでも云ふのか。進藤の阿父さんに脅迫されることでも云ふのか。そんなことなら心配することはなす。」

貞子は黙つて泣いてゐた。

「どうなすつたんでせうねえ。」と、家壽子は憫むやうに云つ

「べうも判らなす。」

匡三は矢はり首をかしげてゐた。併し彼は大抵想像した。貞子が雪子を隠したのは事實に相違ない、恐く彼女は其の罪を悔いて、自分の前に泣いて詫びてゐるのであらう。それならば別にむづかしいことは無い。その事情は何うであらうとも、正直に雪子の隠れ家を白狀して、早く連れて歸れば可いのである。匡三は先づそれを探り出さうとした。

「雪子さんは一體どこにゐるんだ。」

貞子はたゞ泣いてゐるばかりであつた。匡三は容赦なく又訊いた。

「泣いてゐちやあ判らない。正直に云ふが可いぢやないか。雪子さんの居所をお前は知つてゐる筈だ。」

「知りません。」

「眞實に知らないのか。」

「もうそんなことを……。後生ですから訊かないでください。」

「どうしても云はないのか。」

「知りません、全く知りません。」と、貞子は聲を立て、又泣いた。

どうしたら可いかと匡三は考へてゐる中に、彼は又俄に思ひ出した。表には進藤が待つてゐる筈である。鳥渡こゝで家壽子と立話をしてゆく積りのところを、色々の談話がそれからそれへと進んで行つて、思ひのほかには時間を費してしまつたが、進藤はまだ温和くそこに待つてゐるであらうか。貞子がこゝへ来たことを知つて彼は何う考へてゐるであらうか。萬一彼を取逃して了つては、また探し出すのが面倒である。

妹をそのままにして置いて、匡三は念のために表へ出て見ると、その軒下には進藤の姿がなかつた。匡三ははつと思つた。

「おい進藤君、進藤君。」

試しに二三度呼んで見たが、何處からも返事はなかつた。進藤の立つてゐたらし

いあたりには、軒ランプの寒さうな光が薄暗く流れてゐるばかりであつた。

(五)

進藤はどこへ行つてしまつたか。あるひは父の宿へたづねて行つたかも知れないと思つたので、匡三はその向ふ横町へ入つた。さうして、横田といふ家を探し歩いたが、もう十一時を過ぎて、どこの家も皆な寢静まつてゐるので、匡三はそこを探し出すのに餘ほどの時間を費した。やうく探し當て、門を叩くと、それは小さい荒物屋であつた。

四十ぐらゐの女房が寢惚けた顔をして出て来て、進藤さんはこの四五日些とも家に寝たことはないと言つた。併し唯つた今、若い男と一緒に歸つて来て、又すぐに出て行つたと話した。

若い男は進藤政治に相違ない。彼は偶然こゝで父にめぐり逢つて、一緒に連れ立つて行つたのであらう。進藤が約束通りに父を欺いて、雪子の隠れ場所へ案内されて行つたものとすれば、其のあとを尾けなかつたのは自分の手滑落であつた。匡三は自分の遅かつたのを悔んだ。

「進藤さんは若い娘を連れて来たことはありませんか知ら。」

「いゝえ。」

匡三は又失望した。彼は更に女房に向つて、進藤の出先に就いて心當りを訊いて見たが、これも更に要領を得なかつた。

「どうも夜分お邪魔をしました。」

匡三はあきらめて其處を立去つて、又引返して洗濯屋の前の大通りへ出ると、向ふから一人の男が急いで来た。井倉ではないかと透して視る中に、軒ランプの光で見付けたらしい、先方から早くも聲をかけた。

「先生ぢやありませんか。」

「井倉君か。どうだつた。」と、匡三は立停つた。

「先生。」と、井倉はすぐに近寄つて囁いた。「貞子さんはまだ歸りません。」

「さうか。それだけか。」

「いや、まだ御報告することがあるのであります。實は先刻わたくしがこゝを通りますと、貞子さんと進藤老人とが立つてゐたのです。」

「むゝ。」

「私は二三軒手前の軒下に隠れて聽いてゐますと、貞子さんは何か頻りに泣聲を出して、相手に恨を云つてゐるらしいのです。貞子さんは非常に激昂してゐるやうでした。老人の方でも怒つてゐるやうでした。」

「その云つてゐることは判らなかつたか。」と、匡三は訊いた。

「何でもあの老人が貞子さんを欺したとでも云ふらしいのです。貞子さんは非常に

口惜がつてゐるやうでした。貞子さんは警察へ訴へるとか云つてゐました。

「警察へ訴へる……。」

「ところが、相手は平氣であるらしいのです。そんなことをしたら私よりもお前の爲めになるまいとか云つて、平氣で冷ら笑つてゐるらしいのです。貞子さんは無暗に口惜がつて泣いてゐました。」

「それから。」

「終に老人の方では相手にならずに行つてしまひました。貞子さんはその電信柱に倚りかゝつて泣いてゐました。そこで、私は何うしようかと考へたのです。老人のあとを尾けようか、貞子さんを監視してゐようかと……。結局、老人の方を尾けることにして、五六軒ばかり見えがくれに追つて行きますと、老人はその居酒屋へ入りました。それを見ごぼけて又引返して來ると、貞子さんの姿はもう見えませんでした。それが僅か四五分ぐらゐの間でしたが、もう何處へ行つて了つたか判

らないのです。」

不思議に堪へないやうな眼をしばたゝきながら、井倉は又云つた。

「わたくしも何だか氣になるものですから、そこらを無暗に歩いて見ましたがどうしても貞子さんは見えなくなつて了つたのです。」

(六)

「貞子は何うしても見えなかつたか。」

「見えませんでした。」と、井倉は云つた。「それから又引返して居酒屋の前へ云つて暖簾の間から覗いて見ると、老人は旨さうに酒を飲んでゐました。やがて赤い顔をしてふらふら出て來ましたから、私は又竊と其のあとを尾けようとする、老人は酔つてゐても直に氣が注いたらしいのです、私の方をぐつと眺んで、山出しの書生

どもが寄集つて詰らない智慧を出すな。俺のすることが貴様達に判るものか。あんまり深人をするに、飛んだ後悔の種を蒔くやうなことが出来るぞと、家へ歸つて須郷匡三に然う云へと、冷ら笑ひながら云ふのです。わたくしも腹が立ちましたけれど、喧嘩をする譯にも行きませんし、相手に覺られた以上はもう其後を尾けても駄目だと思ひましたから、黙つてそこに突つ立つてゐますと、老人は筋向ふの横町へすた／＼入つてしまひました。私はそれから雑司ヶ谷の方へ急いで行きましたが、貞子さんはまだお歸りになりませんでした。ほかには誰も見えませんでした。もう少し前に芹澤家壽子さんが見えただけだと女中が云つてゐました。」

井倉の報告はそれで終つた。彼は貞子と進藤老人との押着に就いて疑念を抉んでそれを最も重要な事件として匡三に報告する積りであつたらしい。實際それは重要事件に相違なかつた。それ等の事實を綜合して考へると、貞子は何か進藤老人に欺かれて、雪子を連れ出して彼の手渡しに渡したらしい。さうして、彼女が欺かれたと覺

つた結果が、井倉の立聞をしてゐた押着となり、更に家壽子の家へたづねて来るやうな順序となつたのであらう。斯うなると、匡三は妹の身の上がいよいよ不安になつて來た。先刻の口吻から考へても、萬一何か無分別なことでもするのではあるまいかと危まれた。

「井倉君。一緒に來て呉れ給へ。」

匡三は先に立つて再び露地の奥へ入つた。木戸をあけて聲をかけると、家壽子はすぐに出て來た。

「妹はゐますか。」

「あら、お逢ひになりませんでしたか。」と、家壽子は眼を瞪つた。匡三も驚いた。

家壽子の話によると、匡三はなか／＼歸つて來ないので、貞子は兄さんに既う少し話したいことがあるから探して來ると云つた。屹と歸つて來るに相違ないから、もう少し待つてゐると家壽子は切りに抑留めたが、貞子は振放すやうにして表へ出て

行つて了つた。

「濟みません。然うと知つたら何んなにもお抑留め申すのでしたけれど……。」と家壽子は悔むやうに云つた。

どの人も商賣人でないだけに、萬事が手違ひだらけである。匡三も我ながら齒痒くなつて來た。併し貞子はほんたうに自分を探す積りで出て行て、そこらで行き違ひになつたのかも知れない。匡三と井倉はあわただしく引返して表へ出た。

二人はそこらを頻りに見廻して歩いたが、夜更の大通りにも横町にも人らしい影は見えなかつた。雪は幸ひに降歇んでゐたが、暗い空はいよ／＼重く垂れてゐた。何處やらで犬の吠える聲が聞えるほかには、何の響も傳はらなかつた。二人は寒さを堪へて、何時までも其處らをうろ／＼してゐると、彼等の眼の前に角燈の光があらはれた。

「あなた方は何を探してゐるのですか。」と、巡查は二人の様子をじろ／＼見廻しな

がら、詰問するやうに訊いた。

「え、こゝで少し探し物をしてゐるのです。」と、井倉は答へた。

「人を探すのですか、家を探すのですか。又は遺失物ですか。」

巡查の眼はいよ／＼光つて來た。二人は少し返事に困つた。

其七 銀紙と手紙

(一)

巡查が怪むのも無理はなかつた。大の男一人が夜更の町を胡散らしく彷徨つてゐ

るのである。その疑惑を解くために、匡三はとうとう正直に自分達の身許を告げるより他はなかつた。さうして、年頃は二十八九の斯ういふ風俗の女を、こゝらで見掛けなかつたかと巡査に訊くと、その女は雑司ヶ谷方面へ急いで行つたと、巡査は察へてくれた。

「ありがとうございました。」

二人は巡査に別れた。家壽子が心配してゐるだらうと思つたので、匡三は引返して其事を彼女に報告して置いて、井倉と一緒に貞子の家へ急いだ。

もう十二時過ぎである。平素でも戸締は嚴重になつてゐるに決つてゐる。まして此際であるから、表門から案内を頼んでも無駄だと思つたので、匡三はすぐに裏口へ廻つて木戸を叩いた。叩いても容易に返事のないのは豫て覺悟してゐたが。あまりに埒が明かないので、井倉も焦れて來たらしい、彼は垣を乗越えて入らうと云ひ出した。

匡三は少し躊躇したが、この場合であるから同意した。井倉は垣を乗越えて入つて内から木戸をあけて匡三を案内した。二人は更に臺所の雨戸を叩いた。斯うなるど流石に内へも響いたと見えて、寢衣姿のお仙が寒さうに肩を竦めて出て來た。

「おや、いらつしやうまし。」

「貞子は歸つたらう。」と、匡三は内を覗くやうにして訊いた。

「は、はい。」

「え、歸つてゐるのか。」

お仙の返事は少し曖昧であつた。匡三は聲を強くして訊き直した。

「歸つてゐるんだらう。おい、しつかり云へ。」

「はう。」

「私が來たと云つてくれ。」

「もうお休みになつてゐる筈でございますが……。」と、お仙は何だか澁つてゐた。

「寝てゐるなら起してくれ。」

催促されてお仙は怖々引返して入った。二人はそこに立つてゐたが、お仙は容易に出て來なかつた。いくら兄弟の中でも、女の寢込へ押して通るのも悪いと思つたので、匡三は辛抱して其の起きるのを待つてゐたが、お仙は矢張り出て來なかつた。もう待兼ねて聲をかけると、今度は女中のお清が代つて現れた。

「お仙は何うした。私の來たことを取次いで呉れたのかしら。」

「さうでございませう。」

「さうでございませうでは不可い。お前もう一度行つて取次いでくれ。」

「はッ。」

お清は迷惑さうに奥へ行つた。それでもお仙は出て來なかつた。少時経つて、二人の女中は一緒に出て來た。

「あの、先生はお見えになりませんのです。」と、お仙は云つた。

「何、見えない。嘘をつけ。先刻は家にあると云つたぢやないか。」と、匡三は叱るやうに云つた。

「わたくしも其積りでしたけれど、唯今奥へ行つて見ますと、お在がないので、寄舎の方まで探して居りましたもんですから、つい遅くなりまして……。」

匡三は少し考へてゐた。

「可、兎もかくも奥へ案内しろ。」

靴をぬいで臺所からつか／＼上り込んだので、二人の女中もよんどころ無しに其のあとから従いて來た。貞子の居間には寢床が敷いてなかつた。

「妹は今まで起きてゐたのか。」と、匡三は睨むやうに女中を見かへると、彼等の返事はいよ／＼曖昧であつた。

「さうでございませう。妾どもは能く存じませぬので……。」

「ほんたうに知らないか。」と、匡三は念を押した。

お仙もお花も知らないと言つた。先生はもう少し先に歸つて来て、奥の書齋兼居間へ入られたきりで、その後のことは自分達は何にも知らないと言つた。

二人の顔色をじつと見つめてゐたが、匡三は突然に彼等の腕を兩手に引摺んで疊の上に引据ゑるやうに坐らせた。

「これ、隠すな。いや、お前達の眼色でちやんと判つてゐる。お前達は貞子に口止をされて、私に隠してゐるんだらう。貞子は一人ぢやあるまい。進藤が来てゐるだらう。いくら隠してもこれが證據だ。」

匡三は疊の縁の落ちてゐる銀色の小さい紙片を願で示した。

「これは卷蕘の箱に入つてゐる銀紙に相違ない。貞子が蕘を喫む筈はない。進藤

は私の家へ来た時には蕘を有つてゐなかつたが、途中で卷蕘のバットを買つた。この銀紙は確實にそれだ。どうだ、進藤はもう少し前にこゝへ来たらう。」

女中達は身を固くして、啞のやうに黙つてゐた。匡三は自分の推測がいよいよ中つたのを知つて、わざと聲を暴くした。

「さあ、どうだ。お前達はこれでも隠すか。正直に云へ。進藤がこゝへ来て、それから何うした。これほど確實な證據があるのに、まだ隠すなら俺にも料見があるぞ。」

嚇されて、女中達は顔を見合せてゐたが、お仙が先づ怖るゝ口を切つた。

「まことに申譯がありません。實はもう少し前に進藤さんがお見えになりました。」

「進藤が来たか。」

「先生はまだお歸りになりませんと申しますと、進藤さんは少時立つて考へてゐるやうでした。そこへ丁度に……。」

「貞子が歸つて来たのか。」

「はい。」と、お清が代つて答へた。「先生は黙つて進藤さんの袖を掴んで、奥の方へ無茶苦茶に引張つておいででした。それから何うしたか、わたくし共は全く存じません。」

「二人は外へ出て行つたんぢやないのか。隠すな。」と、匡三は又睨んだ。

「實はあなたがお出でになつたことを、わたくしが奥へお取次にまゐりますと、先生と進藤さんは向ひ合つて坐つておいででした。」と、お仙が云つた。「さうしてわたくしがお取次をいたしますと、二人は顔を見合せておいででしたが、やがて先生はわたくしの方を向いて、兄さんをすぐに通してはならない、お前は少しこゝに待つてゐると仰しやいました。」

「むゝ。さうして……。」

「それから先生はコートをお召しになりました、進藤さんと二人で表口から……。」

そこへお清さんがあとから催促に來ますと、先生はわたくしごもに何にも云ふなど仰しやつて……。」

「さうか。」と、匡三は太息をついた。自分達か裏口に待つてゐる間に、二人は表から立去つて了つたのである。井倉を表へ廻らせて置かなかつた不注意を、彼は今更悔んでも既う遅かつた。

「貞子はほかに何にも持出した様子はないか。」と、匡三は又聞いた。

「小さい信玄袋をお持ちになつたぎりの様でございました。」と、お仙は云つた。

何かそこらに置手紙のやうなものはないかと匡三は見廻したが、机の上はきちんとかたづけ片附いてゐて、何んにも眼に觸れる物はなかつた。匡三は念のために机の抽斗をあけて見ると、その上の方に一通の女文字の封書があつた。本所のスタンプを捺した郵便で、封はもう切れてゐた。何かの手懸りになるかも知れないと思つて、彼はその手紙を抜き出して見ると、それは赤い色鉛筆で半紙に書いたもので、筆の痕が

擦れて甚く読み難いのを、匡三は電燈の灯に透しながら、辛うじて終まで読み下した。

それは栗田雪子から貞子へ送つて来たものであつた。

(三)

雪子の手紙の文句は斯う云ふのであつた。

先生——わたくしは泣きながら此手紙を書いて居ります。先生は夜中にわたくしを起して、阿母様が急病で進藤さんが迎ひに来たと仰しやいました。わたくしは吃驚して、先生に手傳つて頂いて、すぐに仕度をして表へ出ますと、進藤さんではなくて、進藤さんの阿父さんが待つてゐました。阿父さんは進藤さんの代理に來たと云ひました。さうして、わたくしを車に乗せて行きました。

先生——今から考へると、まるで夢のやうです。わたくしを乗せた車は暗い夜路を急いで駈出して行きました。わたくしは聲を出すことも出来ません。車へ乗せられる時に、口には手拭のやうなものをしつかりと押込まれてゐるんですもの。その上に、騒ぐとこれだぞと云つて、進藤さんの阿父さんが短刀のやうなものを抜いて見せたんですもの。まして夜中です、誰も助けてくれる人はありません。わたくしは悲しいと怖ろしいとで、半分は既に死んだ者のやうになつてゐました。先生——わたくしはそれから何處かへ運ばれて、まるで明店のやうな古い家の暗い二階へ押籠められてしまひました。わたくしはこれから何うなるでせう。わたくしは寄宿舎を出る時に、御承知の小さい信玄袋の中には色鉛筆と半紙と蓋口とが入つてゐました。わたくしはその鉛筆で手紙を書きかけましたが、それを誰に頼むことも出来ませんでした。

先生——人間は一生懸命になると色々の智慧が出るものです。夜が明けてから、

その家には十二三の女の兒があることを知りました。その兒が朝の御飯をわたくしのところへ持つて来た時に窃と訊きましたら、こゝは向島の須崎町の黒川といふ家ださうです。わたくしは少しばかりのお金を遣つて、その兒に状袋と郵便切手とを内證で買つて来て貰ひました。それから又その兒に頼んで、この郵便を内證でポストへ入れて貰ひました。その兒は伶俐さうな兒ですから、多分わたくしの頼んだ通りにして呉れるだらうと思つて居ります。

先生——わたくしは逆も逃出す譯には行きません。その兒の阿母さんや祖母さんらしい人が、時々怖い眼をして二階を覗きに來ます。うつかり逃げようとしたら何んな目に逢ふか知れません。わたくしは今日も明日も、誰も救ひに來てくれない限りは、毎日毎晩泣いて暮すのでせう。お察しく下さい。

先生——あなたはわたくしが今、こんな怖い目に逢つてゐることを御存知でせうか。進藤さんの阿父さんは何ういふ料見で、あなたとわたくしとを欺して、わ

たくしをこんな目に逢はせるのでせうか。わたくしには些とも判りません。

先生——どうぞ早く來てわたくしをお救ひください。わたくしに何か悪いことがあるならば、どんなにもお詫をいたしますから、どうぞお免し下さい。

栗田雪子

須郷先生

この手紙を讀んでしまつて、匡三は考えた。雪子は何故このことを直接に自分の家へは報せて遣らないで、貞子の方へ訴へて來たのであらう。こんなことを突然に報せて遣つて、親達をおどろかすに忍びないといふ遠慮かも知れない。平素から貞子を師とも親とも慕つてゐる結果かも知れない。併しそれよりも匡三の注意を惹いたのは最後の一節であつた。

わたくしに何か悪いことがあるならば、どんなにもお詫をいたします——匡三はこの文句の意味を考へた。伶俐な雪子は、貞子と進藤老人とが共謀であるらしいこと

を薄々覺つて、斯うした詞を洩したのではあるまいか。貞子はこの手紙を見て如何に感じたであらうか。

匡三は繰返してその手紙を読んだ。

(四)

それにしても、雪子の居所が判つたのは何よりの仕合である。この手紙に書いてある通り、向島須崎町の黒川といふ家に押籠められてることが判然した以上、すぐに行つて取戻して來なければならぬ。貞子もこの手紙に泣かされて、あるひは前非を後悔して、進藤と一緒に雪子を救ひに行つたのではあるまいか。それは彼等の勝手として、自分は又自分だけのことを盡さなければならぬ。斯う決心して彼はすぐに起つた。

臺所に首を長くして待つてゐる井倉を呼んで、雪子の手紙の一條を囁くと、井倉も眼を瞪つた。

「先生。これからすぐに向島まで行きますか。」

「まあ。」匡三は考へた。

この夜ふけに雑司ヶ谷から向島まで行くのは随分難儀である。併し夜の白むまで待つてはゐられない。もろくの罪惡は兎かく夜陰に行はれるものであるから、一足ちがひで今夜の中にも雪子の一身上にどんな禍が起らないとも限らない。匡三は夜通しで向島へゆくことに決めた。一先づ江戸川端の家へ歸つて、近所の車宿を叩き起して、井倉と二人で乗り出すことに相談を決めて、二人は貞子の家を出た。

「留守を注意してくれ。斯ういふ時には又どんなことが出來るか判らない。」

お仙とお清にくれぐれも云ひ聞かせて、匡三はもとの裏口から出ようとする。先に立つて木戸をあけた井倉は何を見付けたのか、思はず呼吸を嚙んで一足退つた。

進藤老人が無言で内を窺つてゐるのであつた。

匡三は井倉を引退けて、大膽に老人の前に進み出た。

「進藤さん。またこゝでお目にかゝりましたね。あなたは貞子にまだ御用があるんですか。」

「用がある。私は俵を受取りに來たのだ。進藤政治をこゝへ出して貰ひたい。」

「その進藤政治君は先刻までこゝにゐたさうですが、もう何處へか行つて了ひましたよ。」と、匡三は嘲るやうに云つた。

「ほんたうか。」と、老人は吃驚したやうに叫んだ。「ほんとうに何處へか行つて了つたか。むゝ、貞子も一緒だな。」

「さうらしいやうです。」

「むゝう。」と、老人は又唸つた。「畜生……。さうく俵を誘ひ出したな。そんなことだらうと思つて先刻から探してゐたのだ。」

「あなたは先刻進藤君に逢ひませんでしたか。」と、匡三は空呆けて訊いた。

「逢つた。芹澤家壽子の家の近所で逢つた。」と、老人はうなづいた。「それから私の家へ一緒に來て、それから又ある所へ一緒に行かうとする……。」

「途中で逃げたんですか。」

「あんまり柔順で少し可怪と思つたが、よもやと油斷したのが手滑落で、途中から又逃げてしまつた。屹こゝへ來たのだらうと思つて、あとから追つて來ると……畜生、畜生、さうく大事の俵を玉無しにして了ひ居つた。貴様の妹の須郷貞子といふ奴は俺の仇だ。斯うと知つたら、早く二字國俊を抜いたのを……いや、彼等のゆく先は大抵判つてゐる。すぐに追掛けて俵を取戻して來る。」

雪融路に地團太を踏んで、老人は表の方へ行きかけるのを、匡三は抑留めて訊いた。

「さうして、二人のゆく先は何處です。何處だと思ひます。」

「貴様達に教へてゐる暇はない。」

匡三を突き放して、足の達者な老人は駈けるやうに行つてしまつた。匡三は妹の身の上も不安であつた。併しこの場合、的途のない二人のゆくへを探すよりも、先づ雪子を救ひ出すのが正當の順序であると思つたので、彼は老人をそのままに遣過して、井倉と一緒に自分の家へ歸つた。

井倉はすぐに近所の車宿を叩き起しに行つた。夜半であるから餘ほど暇取れたが兎もかくも二臺の人車を呼んで來た。それを待つてゐる間も匡三は凍るやうに寒かつた。

其八 海岸の一夜

(1)

「雪子さん。どうぞ勘忍して遣つてください。皆な妹が悪いですから。」と、匡三は手を突かないばかりにして、栗田雪子の前に妹の罪を詫びた。

きのふは匡三に取つて、心も身體も忙しい一晝夜であつた。併し彼はとうとう最後の目的を達した。雪子の居所が判明した以上、彼女を取戻すのは案外に容易であつた。夜のあける頃に向島へゆき着いて、その黒川といふ家をたづね當て、匡三

と井倉とは家の前後を見張つてゐた。さうして、その女房らしい女が表の戸をあけるのを待つて、すぐに入口の狭い土間へ入いて行つた。不意を襲はれて少し度を失つたらしい女房に向つて、こゝの二階にあづけられてゐる娘を渡せと云つた。女房も無論柔順には承知しなかつたが、此方には確實な證據がある、強て故障を云ひ張るならば警察の手を假りても取戻してゆくと云ふ匡三等が強硬の態度に嚇されて女房も終局には我を折つてしまつた。彼等はこの他にも後暗いことがあるらしく、警察と聞いて甚く悸へて、雪子をおとなしく此方へ引渡した。

一種の牢獄に春の寒い一晝夜を泣きあかした雪子は、初めて明るく空の下に出た。井倉は電車で歸ることにして、雪子はその人車に乗せられた。匡三の人車もその後につゞいた。幌を深くした二臺の人車が江戸川の家へ歸り着いたのは午前九時頃であつた。取りこへず雪子を二階へ扶けあげて、匡三は先づ彼女に詫びた。彼は兄として妹の罪を繰返して詫びるより他はないのであつた。

「一體、貞子がどう云ふ料見で、進藤の父と共謀して貴女を苦しめようとしたのかそれは私にもまだ詳しく判りません。併しどう辯護し見ても、貞子が悪いに決つてゐます。わたくしは妹に代つてくれぐも御詫をします。どうぞ勘忍して遣つてください。いづれ貞子の居所が判り次第、あなたの前へ連れて来て改めて當人にも御詫をさせます。そこで、まことに手前勝手を申すやうですが、どうか今度のことは御内聞にお願い申す譯には行きませうまいか。何しろ、一昨日の夜中から今朝に亘つて、その間わづか一日のことですから、世間でも恐く知りますまい。寄宿舎にゐる生徒の中でも、あなたと一つ部屋に寝てゐた南條登美子さんだけが多少はそれを感じてゐるらしいのですが、それとても貴女から何とか云つて口止をして下さればほかには殆ど知つてゐる者はありますまい。これが方々へ知れ渡ると、あなたの御迷惑、御両親の御迷惑、それよりも第一に妹が困ります。この秘密が他人に洩れたら、妹はもう世間に顔出しが出来なくなり、教育者として世に立つことは出来、

なくなりませす。勿論、それも心柄で致方はないのですが……。」
 云ひかけて匡三は嘆息をついた。その罪を憎みながらも、彼は現在の妹を生きながら葬るに忍びなかつた。

「若し貴女が妹の罪を免して、この一件を秘密に済ませて下されば、妹に取つて何んなに幸福だか知れませせん。私も彼女の兄として、くれぐれもあなたにお願い申します。手前勝手は萬々心得て居りますが、何分にも唯つた一人の妹が可哀さうでなりませせん。彼女も決してそんな人間ぢやない筈ですが、何かの迷ひから魔が魅したのです。そこを憫み、又わたくしをも憫んで下すつて何とか寛大の御處置が願へますまいか。」

匡三の眼には雫が宿つた。雪子もそれに動かされたらしい、彼女も袂から探り出したハンカチーフを眼にあてた。

「よく判りました。妾、決して須郷先生を怨まうとは思ひませせん。仰しやる通り、

こんなことが世間へ知れますと、両親にも迷惑をかけませす、須郷先生にも御迷惑をかけなければなりませせん。もう何んなことがありませしても、妾は決して誰にも申しませせん。どうぞ御安心くださいませし。」

「いや、ありがたうございます。」と、匡三は濡んだ眼を輝かした。

「それにしても、須郷先生は何地へいらしたんでせうか。」

「さあ。」

兄の眼はまた陰つた。

(11)

その中に井倉もあとから歸つて來た。匡三は午頃まで雪子を二階に休息させて、午飯を喫はせた後に自分が一緒に付き添つて、雑司ヶ谷の貞子の家まで彼女を送つ

て行つた。これで兎も角も一方の埒は明いて、匡三もほつと一息ついたが、彼の胸にはまだ暗い影が横はつてゐた。それは貞子と進藤とが行方不明であることで、二人ともにそれ限り雑司ヶ谷の家へは立寄らないのであつた。

「どこに隠れてゐるのかしら、さうして、この先どうする積りか知ら。」と、匡三は彼等の前途を危んだが、進藤老人でない以上、彼は二人のゆく先に就いて些とも見當が付かなかつた。

さうした苦勞を胸一ぱいに抱へながら、匡三は午後二時頃に江戸川の家へ歸ると、井倉はその顔を見るとすぐに報告した。

「先生。唯つた今、貞子さんの電報がまゐりました。」

匡三は急いでその電報をうけ取つた。電報には唯簡短に「アトタノム、サダコ」とあつた。後頼む——昨夜家壽子の家で出逢つた時に、何だか遺言めいたことを口走つたのを思ひ出して、匡三は愕然とした。電報は國府津發である。匡三は兎も角も

國府津へ行つて見ようと思つた。すぐに仕度をして家を出て、東京驛から汽車に乗つて國府津に着いたのは、もう午後五時を過ぎた頃であつた。

彼は停車場の驛夫や新聞賣子などを捉へて、斯ういふ男と女との二人づれが下車しなかつたかと訊いた。彼は出張の巡査にも訊いた。それ等の返事を綜合して考へると、貞子と進藤らしい二人連は午前九時頃にこゝへ下車したのである。さうして停車場前の休憩所に立寄つたのを見た者があるといふので、匡三はすぐにその休憩所へ行つて聞合せると、二人の風俗も人相も確實にそれであつた。その二人はそこで餘を喫つて、それから小田原行の電車に乗つた。何でも小田原で乗換へて、更に海岸の某温泉へ行く積りらしく、彼等は女中にむかつて熱海行の汽車の時間などを訊いてゐた。

これだけの事實が判つたので、匡三は又すぐに其のあとを追つた。彼も電車に乗つて、更に小田原で汽車に乗換へて、南の海岸の方角へ急いだ。併しその方面には

三ヶ所の温泉場があるので、匡三も何地へ行つて可いか、その方角を定めるのに迷つたが、取あへず海岸に接近してゐる某温泉場に行き着いて、東京の客の泊りさうな比較的ひかくてきに大きい旅館りよくわんの玄關げんかんに立つた。

斯ういふ風俗ふうぞくの二人連が泊つてゐるかを訊くと、出迎への女中達は確實たしかに来てゐると答へた。

「お連様でございますか。」

「いや、連といふ譯でもない。兎も角も別の座敷へ通してくれ。」

海に向つた八疊の間へ通されて、匡三は一先づ落付いた。それでもまだ全く安心出来ないで、彼は茶を持つて來た女中に念を押して訊くと、人相も風俗もよく似てゐるが、男の年頃が進藤よりも老けてゐるらしく、何うしても二十六七だらうと女中は云つた。

「ごこの座敷ざしきにゐるんだ。窃と教へてくれないか。」

女中に案内されて、匡三は奥二階へゆくと、丁度その二人が風呂場から上つて來るのに出逢つた。女中は窃と指さして教へた。

匡三は失望した。成ほど、人相は能く似てゐるが、男は進藤政治でなかつた。女は貞子でなかつた。彼等は全く別人であつた。

「違ひましたか。」と、女中は低聲で訊いた。匡三は黙つて頭を掉た。

「何しろ、私に早く夕飯を喫はしてくれ。」

「お風呂は……。」

「風呂は後だ。」

ゆふ飯を喫つて了つて、匡三は更に近所の旅館を探して歩かうと思つた。

(三)

急らしい氣持で、匡三が遅い夕飯を喫つてしまつた頃には、海も山も大きい闇に鎖されてゐた。匡二は箸を投げ出すと、すぐに宿を飛び出して、先づ一番に隣の旅館をたづねたが、そこにも其れらしい宿泊客はなかつた。あるひは人の目を避けるために、わざと小さい宿屋に潜んでゐるかも知れないと思つたので、彼はそれからそれと片端から訊いて歩いた。

夜は寒いのと暗いので、海岸にはもう人通りはなかつた。物すごいやうに岸を揺つてゐる浪の音を聴きながら、匡三は潮明りを便りに辿つてゆくと、二三間先の海端に黒い影の動いてゐるのが見えた。影は二つ三つ纏れ合つてゐるらしかつたが、やがて其の一つは海の中へ消えた。匡二ははつとして駆寄ると、残る二つの影は慌てて逃げようとした。

潮の光だけでは判然見えなかつたが、それが進藤と貞子であるらしいことを匡三は直覺したので、つゞいて飛びかゝつて先づその一人の肩に手をかけた。それは女であつた。

「おい、お前さんは誰だ。貞子ぢやないか。」

女は返事をしなかつた。匡三はその腕を掴んで、人家の灯の洩れる方へ引摺つて行かうとする時、女は曳かれながらに何か帯の間から掴み出したらしかつた。さうして、二足三足引摺られてゆく間に、彼女は片手でその白いものを自分の口に當てがつた。匡三は氣が注いで其手を押へたが、もう遅かつた。白い紙のやうなものはひらりと落ちて、女も一緒に土の上に膝を突いた。

「劑藥か。」と、匡三は驚いて思はず叫んだ。

「兄さん。勘忍してください。」

女は矢はり貞子であつた。

「お前の宿は何處か。」

「宿は、ありません。」

匡三は妹を引抱へて、自分の宿へ連れて行かうとすると、あとから一つの影が窺
と尾いて来た。

「進藤君か。」と、匡三は聲をかけると、影は黙つて立竦んだ。

「手を假してくれ給へ。妹を私の宿へ連れて行くから。」

進藤は無言で近寄つて来た。さうして、匡三と一緒になつて、貞子を彼の旅館へ
運び入れた。驚いてゐる女中や番頭達を叱るやうにして、匡三は早く醫師を呼んで
くれと頼んだ。貞子の口唇からは紅い血が滲み出してゐた。

「兄さん……兄さん……勘忍してください。妾が悪かつたんです。進藤さんは
何にも知らないんです。」

苦しい中でも彼女は男を庇てゐるらしかつた。進藤は眞蒼になつて顫へてゐた。

「お前は……。」と、匡三は低聲で訊いた。「なせ雪子さんを連れ出して進藤の阿父
さんに渡したんだ。譯を聞かしてくれ。」

「それでなければ……進藤さんと一緒にほしなにと云ふので……。」

「ぢやあ、雪子さんを渡せば、進藤君と夫婦になると云つたのか、進藤老人が然う
云つたのか。」

「妾……欺されました。」と、貞子は口惜さうに云つた。「妾……進藤さんと夫婦
になりたいばつかりに……あの人にだまされて……濟みません、濟みません。」

「で、あの老人がお前を何う欺したんだ。」と、匡三は彼女の耳に口を寄せて又訊い
た。

「雪子さんを受取つて置きながら、進藤さんも一緒に連れて行かうとするんです。
あの人は進藤さんを雪子さんと夫婦にする積りなんです。それが……それが……
妾、口惜くつて……口惜くつて……。」

「それにしても、罪もない雪子さんをあの老人に渡さうとしたのは……。」
貞子は身を悶へて、兄の膝に凭れかゝつた。さうして、血を吐きながら云つた。

「妾……悪かつたんです。妾、この頃は雪子さんが憎らしくなつて……。あの人があなければ、進藤さんの阿父さんも妾をこんなに害めやしないだらうと思つて……。何だか雪子さんが仇のやうに憎くなつて……。』
彼女はもう息が絶々になつたが、醫師はなか／＼來なかつた。

(四)

瀕死の彼女をあまりに詮議するのも良くないと思つたので、匡三は更に進藤の方に向き直つた。その間に對して、進藤がおど／＼しながら答へたのを一切綜合すると事實の真相は斯うであつた。

貞子と進藤との戀は、男よりも女の方が一層熱烈であつた。一種の陰謀を巧らんでゐる進藤老人は何うかしてこれを引放さうと企てたが、貞子は死んでも男を放すまいとしてゐるらしいので、彼は更に一策をめぐらした。彼は貞子に對して、そんならば栗田の娘を此方へ渡してくれ、それを人質にして自分は男爵家から相當の金を取る。その代りに、伴とお前との關係は私も大目に見逃して置くよと云つた。

普通の考へから云へば、貞子はそんな相談に乗るべきではないが、彼女自身も白狀してゐる通り、彼女は近ごろ雪子を憎んでゐた。進藤老人が雪子を自分の伴に結び付けようと企てゝゐることを知つた以來、彼女は抑へ難い嫉妬から雪子を憎んでゐた。その結果、彼女は老人にあざむかれて、憎い雪子を敵の手に渡した。而も老人はそれで満足しなかつた。最初の約束を反古にして、更に伴をも自分の手に取戻して、無理に雪子と結び付けようとした。

欺かれたのを覺ると同時に、貞子は自分の罪を悔いた。彼女は老人に迫つて雪子の居所を教へると云つたが、老人は無論教へる筈がなかつた。憤怒と悔恨とに殆ど物狂はしくなつた彼女は、寧ろ男と一緒に自滅しようかと思ひ詰めたところへ、恰

も雪子の悲しい手紙が着いた。彼女はいよいよ堪らなくなつて、再び進藤老人のところへ尋ねて行つて、途中で彼に出逢つたのを幸ひに、是非とも雪子を返してくれ左もなければ警察へ訴へると云つたが、老人は矢はり取合はなかつた。悶へに悶へて家へ歸ると、進藤が丁度來合せたので、二人は膝を突き合せて此後の相談をしてゐると、そこへ匡三が追つて來た。二人は一旦逃げ出して、その晩は品川邊の宿屋へ泊つて、今朝の瀛車で此地へ來ると、今度は進藤老人が追つて來た。

栗田一家の人々は去年の夏こゝへ避暑に來て、進藤もその供をして來たことがあるので、老人は二人のゆく先を恐く此處と想像した。それが的中して二人はさうさう探し出された。暗い海岸で貞子と老人との間に激しい衝突が起つた。怨恨の積つてゐる貞子は、必死になつて抵抗して、酔つてゐる老人を岸から突き落してしまつた。

この話が終つた頃に醫師が來た。醫師は貞子を診察して、何分にも劇薬を多量に

飲んでゐるから既う回復の見込はないと云つた。匡三と進藤は悲しさうな眼を見合せて。匡三は妹の耳元で又囁いた。

「貞子……貞子……。雪子さんは今朝取戻して來たぞ。」

「雪子さん……雪子さんは歸つて來ましたか。」と、貞子は嬉しさうに云つた。

「雪子さんはお前の罪を免すと云つてゐるぞ。」

「兄さんは……。」

「私も免す。」

匡三は眼で知らせると、進藤は代つて貞子を自分の膝の上に抱きあげた。

「貞子さん……貞子さん……。」

貞子は僅に首肯くばかりであつた。

死後の検案によると、貞子はもう妊娠四ヶ月であることが判つた。

一方には進藤老人の死體を海から引揚げたが、彼は岩石に頭蓋骨を打碎かれてゐ

た。

「あなたは親と戀人とを同時に失つた。私は一人の妹を失つた。不幸な二人が今夜はこゝで通夜をしませう。」と、匡三は眼をしばたゝいた。

進藤も黙つて眼を押へてゐた。

南の國でも今朝は寒かつた。昨日の名残らしい薄い雪が又ちら／＼と降つて來た。

う

す

雪をはり

海賊船

其一 兵庫の曉

二

(一)

暖い四國では、花も既う散り盡した三月の末であつた。先祖以來住み馴れた故郷の山の青葉をうしろに見ながら、戸崎新九郎は讃州丸龜の浦を船出することになつた。

新九郎は丸龜の藩中で百二十石取りの然るべき侍であつた。それが安政二年の三月四日、上巳の節句が済んだ明る日に、突然重役のもとへ呼び出されて、三日の間に家族を召連れて御領分内を立退けと云ふ申渡しを受けた。但し病人ども有之候節は半月の猶豫は苦からすと云ふのであつた。この時代の習として、よくよくの重

罪人でない限りは、一方に三日以内と嚴重に云ひ渡して置いて、一方に相當の猶豫期間をあてへるのが、上に立つ人の情であつた。

併し何の科で突然に追放を受けるのか、新九郎には些とも判らなかつた。所謂「寝耳に水」とは此事であつた。主取りの身分として、それが君命とある以上、彼はよんどころなく御請をしたものゝ、どう考へても其理窟が判らなかつた。

「學問の祟であらう。」と、彼は竊に思った。彼は陽明學を修めてゐた。由來、この學派は徳川幕府に睨まれてゐるところへ、天保度には大阪の彼の大鹽平八郎の騒動が起つた。それも陽明學が禍をなしてゐると云ふので、その以來この學派の詮議がいよいよ厳しくなつた。家來としては別に何の科もないのであるが、主君は幕府の忌諱に觸れるのを避けて、突然彼を追ひ拂ふことになつたのであらう。斯う考へると、新九郎は主君の無慈悲を怨む譯にも行かなかつた、重役達の不公平を憎むことも出来なかつた。彼は柔順に住み馴れた屋敷を立退くことに決めて、家へ歸つて

其話をすると、妻の千鶴もおどろいた。

四

新九郎は今年四十歳で、妻の千鶴は三十四であつた。夫婦の間には十五のお房と十一のお俊と二人の娘があつた。斯ういふ始末であるから、若黨と仲間には暇を出して、お末といふ若い女中だけを連れてゆくことにして、夫婦は旅立の支度に取りかゝつた。何をいふにも先祖以來住み馴れた土地を去るのであるから、親類や知己の人達にも暇乞ひをしなければならず、家財の始末をしなければならず、迎も申渡しの三日の中には埒が明かないので、新九郎は姉の病氣を云ひ立てに半月の猶豫を願つた。その間に何うにか斯うにか一切の仕事を片付けて、親子夫婦の四人と女中のお末とが丸龜の川口から琴平戻りの便船に乗込んだ。

送つて来た知己の人達と、立退見届の役人達とに別れて、船が遠淺の川口を離れたのは三月二十四日の明六つで、細い春雨が白い帆布を濡らせてゐた。「先づこれで好い。」

故郷の土がだん／＼に遠くなるに連れて、新九郎は寧ろ悠暢な、落付いた氣分になつた。前途の不安に脅かされながらも、差當つては籠を出た鳥のやうな軽い氣樂な心持になつて、彼は徐に煙草を煙らしてゐた。

「大阪の藏屋敷には心安い者もある。追放の身を表立つて世話することもなるまいが、蔭になつて相當の助力をして呉れるに相違ない。町人どもにも知己はある。いづれにしても大阪へ行き着けば、路頭に迷ふやうなこともあるまい。」と、彼は妻や娘を慰めてゐた。

「海は静穏でござりませうか。」と、千鶴は覺束なさうに云つた。「わたくしばかりでなく娘達も末も皆な船は初度でござりますので乗らぬ先からそればかり案じて居りました。」

「は、案じることはない。瀬戸内の海は壘の上を行くやうなものだ。私は大阪の藏屋敷へまゐるので、今までに此船にはたび／＼乗つたことがある。こゝらの海の暴

れたと云ふことは曾て聞いたことがない。」と新九郎は事もなげに云つた。

春雨に煙つてゐる四國七島が手に取るやうに見えるのを、新九郎は一々に指さして、旅馴れない女達に説明した。船は順風に二十二三里を走つて、その夕方に播州の室の津に着いた。

「明日はもう大阪へ着くぞ。」と、新九郎は笑ましげに云つた。

その明くる日も雨であつた。少し風も強くなつたので、差したる動搖ではないが千鶴は暈つた。お房もお俊も暈つた。女中だけは確固してゐて、この三人を甲斐々々しく介抱してゐた。お末は藩中の足輕太郎介の娘で、十二の年につゞいて兩親を亡つて新九郎の家へ女中として引取られたもので、云はゞ兒圃の奉公人であるのでこの流浪の場合にも主人に附いて來たのである。彼女は今年十七であつた。

午過ぎの既う七つ(午後四時)近い頃に、船は和田の岬を廻らうとする、俄に風が強くなつた。新九郎が疊の上と受合つたもの的にならなくなつて、大きい浪が船

の中まで轉がつて來た。潮燈で四邊は一面に暗くなつた。乗合の者は皆なもうくきてゐる顔色はなかつた。

「金毘羅まゐりの船に沈んだ例はござらぬ。皆なも金毘羅さん信心めされ。」と、船頭どもは乗合を勵ましながら、必死になつて乗切らうと燥つてゐた。

乗合は口々に金毘羅大権現を念じた。新九郎も念じた。而も海はいよゝ暴れて來て小さい船は揉み毀されさうに搖れるので、船に弱い千鶴もお房もお俊も半死半生になつてしまつた。お末も既う今朝の元氣はなかつた。

「おれは能く〜運に竭きた。」と、新九郎は思つた。

譜代の主人には追ひ放される。乗つた船はこの始末である。萬一この船が顛覆すれば、夫婦親子主従が一度に海の底へ葬られるのである。新九郎も流石に情なくなつた。併し全く不運に付き纏はれて、行く先々で親子夫婦がさまざまの難儀を重ねる位ならば、寧ろこゝで一家眷族が一度に亡び盡して了つた方が仕合であるかとも

考へられた。さう思ふと、彼はもう騒がなかつた。半死半生で唸いてゐる妻子や、ほかの乗合の人達を冷かに視ながら、新九郎は運を天に任せるといふ心持で鎮まつてゐた。

「やあ、空が見えた。」と、船頭が叫んだ。暗い雲の裂目から青い空の色が少し洩れたのである。金毘羅様の御利益はあつた。船中の者どもは皆な蘇生つたやうに喜んだ。

風はだん／＼に凪いで来て、浪も少しづゝ鎮まつた。二响餘りも揺れに揺れた船はその夜の五つ頃(午後八時)にやうやく兵庫の港へ入つた。本来ならば大阪の川口まで真直にゆくべき筈であるが、この時化で船を傷めたので、よんどころなく兵庫の港に避難所を求めたのであつた。疲れ切つた乗合の客は皆な待兼ねて上陸した。新九郎も無論上陸した。

船の修復は三日ほども懸るといふので、新九郎は旅籠屋に逗留して休息すること

にした。

「もう大丈夫だ。船の修繕が暇取るやうであつたら陸をゆく。」

「わたくしはもう死ぬかと思ひました。たとひ何んな難儀を致しましても。もうこれからは陸を参りたうございます。」と、千鶴は眞蒼な顔をしてゐた。

その晩から千鶴は俄に熱が出た。本来が餘り丈夫な生れ附でない上に、夫の俄浪人に就いて心や身體を傷めたところへ、重ねて今日の大暴れに苦しめられたので、彼女はもう弱り果てゝしまつた。新九郎もお末も心配して、夜もすがら色々に介抱したが、千鶴は明る日も枕が擡らなかつた。女連の旅の空で斯うした煩ひに出逢つた新九郎は、重ね重ねの災厄に泣かされたが、それでも彼は出来る限りの看護に手を盡して、氣長に妻の本復を待つてゐると、七日目になつて千鶴はやう／＼に寢床を離れた。

看病の合間に、お末は濱へ毎日出て、船の様子を見てゐると、船の手入れは案外

に早く行きとゞいて、二日目の夕方には帆をあげる事になつた。新九郎もそれを承知してゐたが、この場合どうすることも出来ないで、見す／＼その船には取残されてしまつた。殊に千鶴が何うしても船は忌だと云ふので、陸をゆくことに決めるより他はなかつた。

「もう本復いたしました。明日は發ちます。」と、千鶴は云つた。皆なも其積りで支度をしてゐると、その日の夕方から今度は妹娘のお俊に熱が出た。醫者を呼んで診て貰ふと、それは疱瘡と判つた。

新九郎は又おどろいた。併しそれが疱瘡と判つた以上、重くても軽くても二十一日の間は動かすことが出来ないで、彼は妻と相談の上で宿屋を換へることにした。「今の宿に上下五人が長く逗留してゐては、物入も大分懸る、もう少し廉い宿を見付けて、ゆる／＼逗留するより他はあるまい。」

この先どうなるか判らない浪人の身に取つては、金が命の綱である。此とばかり

の貯蓄と家財を賣つた金と、知己の人から貰つた餞別とを併せて、新九郎は十七八兩の金を有つてゐたが、それを無暗に遣ふ譯には行かないので、成るべく旅籠錢の廉い宿屋を探して、お俊の疱瘡のあがるまで氣長に待たうと覺悟したのであつた。千鶴もそれに同意した。五人はそこを引拂つて、更に小さい旅籠屋に移つた。それは商人宿の中でも下等らしい、殆ど木賃宿も同様の安旅籠であつた。

「わたくし共は何うして斯う運が悪いのでござりませう。」と、千鶴は穢い薄暗い宿屋の二階で窃と涙を拭いた。

「いやそんなことは決して云ふな。悪い後には好いことが来る。」と、新九郎はわざと無頓着らしく云つてゐた。

宿を換へてから雨風の日が多かつたが、お俊の疱瘡は幸いに軽く濟んだ。美しい顔には何の痕も残らなかつたので、千鶴は愁の中にも喜んで祝つた。宿に頼んで少しばかりの酒と肴を買つて貰つて、今夜は心ばかりの内祝ひをしようと相談してゐ

る、それが隣の部屋へ洩れたと見えて、その夕方、隣の客が一尾の鯛を女中に持たせて来た。

「お嬢さまの痲瘡も無事にお済みに相成りましてお目出たうございます。」

それは熊吉といふ三十五六の男で、自分は船乗だと云つてゐた。新九郎よりも十日ほど後れて此の宿へ泊り合せたのであるが、襖一重の隣合せで自然に此方の人達とも親くなつた。お俊が痲瘡に罹つてゐるのを聞いて、何處からか張子の達摩などを買つて来てくれた。さうした親切が親達の心を引付けて、新九郎夫婦も心を置かずに彼と交際つてゐた。それが今夜もこんな祝ひ物を持って来てくれたので、夫婦は喜んだ。喜ぶばかりでなく、少し氣の毒にもなつたので、夫婦はその鯛を女中に焼いて貰つて、それを下物に熊吉にも内祝ひの酒をすゝめることにした。

「これは何うも御馳走さまでございます。」

熊吉も喜んで酒の馳走になつた。彼は如才ない口吻で諸國の話などをして聞かせ

た。船乗といふだけに、彼は遠い國々の名所や風俗などを能く知つてゐた。

「長々心安く致したが、私は明後日あたり發つことにした。御縁があらば又逢ひませう。」と、新九郎は少し紅くなつた頬を撫でながら云つた。

「いよく御發でございませうか。宿屋住居も忌なものでございますから、わたくしも近い中に發つ積りでございます。何人様も御機嫌よろしう。」と、熊吉は名殘惜さうに挨拶した。「さうして、皆様は陸をお越しになるのでございますか。」

「何分にも女どもが船を嫌ふので困る。」と、新九郎は苦笑をした。

「御道理でございます。時化を食つちやあ私どもでも随分難儀しますから、お女中の方がお嫌ひなさるのも御無理はございません。併し此中の雨つゞきで、陸の方も何うでございませうか。」と、彼は首をかしげた。

「路が悪いかな。」

「悪いだけなら宜しうございますが、方々に川止がございませうから。」

(11)

むかしの道中では川止が一つの難儀であつた。兵庫と大阪——もう目の前のやうに思つてゐるものゝ、足弱を大勢連れて、相當の荷物を持つて、陸を行くことの不便は新九郎も萬々承知してゐた。殊にこの頃の雨つゞきで川止などを食つては愈々難儀である。彼はもう一度考へ直さなければならなかつた。

「お嫌ひと仰しやるのを無理にお勧め申す譯ぢやございせんが、お女中方やお荷物がある、陸よりも船の方が餘ほど御都合が宜しいのですが……。」と、熊吉は考へるやうに云つた。「何、天氣さへ見定めて出れば、決して間違ひはないんです。風が好ければ、こゝから大阪まで唯つた半日で、寢轉んで行かれます。それに、然う申しては失禮ですが、お物入も多分に違ひませうから。」

彼の云ふのに嘘は無いと新九郎も思つた。これから陸をゆけば日數もかゝる、物入も多い。船に乗れば半日で行き着いて、費用も半分とは懸るまい。殊に妻も病あがりである。娘も痲瘡を仕舞つたばかりである。彼等を引纏つて徒歩の道中は、その困難が見え透いてゐるので、彼の心はいよゝゝ動かされた。

千鶴も考へた。自分はもう何うしても海をゆくまいと決心してゐたが、だん／＼考へて見ると、陸に行く方が不便が多い。第一に費用の點に於て著るしい相違のあるのは判り切つてゐた。自分の病氣のために七日ほども無駄に宿賃を拂つた上に、又々妹娘の痲瘡のために二十日以上も逗留してしまつた。いくら儉約しても此の十一月の雜費は少くない。この點に就いては、彼女は流石に女だけに、新九郎よりも餘計に胸を痛めてゐた。この先何うなるか判らない浪人の身では、金が何よりも大切である。一錢でも無駄に遣つてはならない。この場合、たとひ苦い思ひを忍んでも、海をゆく方が都合が好い。苦いと云つても多寡が半日の辛抱である。斯う思

ひ直して、彼女は自分の方から船に乗ることを云ひ出した。

「熊吉さんも云ふ通り、陸をゆくのは却つて不便かも知れませんが、何うでござりませう、寧ろ船になされては……。」

「船でゆくか。」と、新九郎は微笑んだ。彼は最初から船に乗りたいたのであつたが、妻の嘆願でよんどころなく躊躇してゐた。それを妻の方から云ひ出されて、彼は満足した。

「妾死んだ氣でまゐります。」

「は、それほど覺悟も要るまい。では、船でゆくことに決めようか。」

相談はこれで決つた。併しこの時代には船を待つと云ふことが一つの難儀で、何處の船が何日こゝへ寄るか、なか／＼判らないのには新九郎も亦困つた。こゝで五日も六日も十日もべん／＼と待たされては迷惑である。例の物入が又嵩んで来る。彼はその事情を打明けて熊吉に相談すると、熊吉は無難作に受合つた。

「では、斯うなさつては如何でございます。こちら様は五人であらつしやいますから、寧ろ船を一艘お頼みなすつては……。」

「五人ぐらゐで船を出して呉れるであらうか。」

「いえ、この近所の旅籠屋にも船待のお客が五六人泊つてゐるやうでございますから、その人達にも聞合せて、一緒に船を頼むことになさいましたら、何うにか相談が付くだらうと存じます。幾らか船賃は高いかも知れませんが、十人以上になれば屹と出してくれませう。私も同商賣ですから、そこは御都合のよろしいやうに懸合ひます。」

「さう出来ればまことに都合が良い。どうか一つ話して見てくれまいか。」

その晩はそれで別れた。あくる日、熊吉は朝から何處へか出て行つたが、夕方になつて歸つて来て、再び新九郎の部屋へ顔を出した。

「旦那様。都合よく参りました。十人以上のお客があれば、大阪まで船を出しても可いと申します。船賃はいつもの通りで可いから、お荷物だけの代を別に頂戴いたしたいと申しますが如何でございませう。ほかの旅籠屋のお客様も皆なそれで、承知しました。」

新九郎も承知した。いよいよ明日は明六つに發つことに決めて、その晩の中に宿の拂ひなども済ませた。荷作りもした。さうして、四つ頃(午後十時)から枕に就いて、一寝入したかと思ふと、熊吉があわたとしく呼びに来た。

「旦那様。奥様。お目醒めでございますか。風の都合で船はすぐに出ると申します。ほかの旅籠屋のお客達はもう皆な出て行きましたから、何うかお早く願ひます。」

新九郎夫婦もおどろいて飛び起きた。お末は娘二人を呼び起して、あわてゝ身支度をさせた。五人は熊吉に急ぎ立てられながら、重い荷物を抱へて宿を出ると、外は眞暗であつた。勿論、何時だか判らない。ことに今夜は曇つてゐるので、漆のや

うに黒い大空の下に浪頭が薄白く見えるばかりであつた。まだ八つ(午前二時)頃ではあるまいかと新九郎は思った。暗い濱邊に三四人の船頭が待つてゐて、先づ新九郎達の荷物を受取つた。

船頭はないので、船頭どもは赤裸で海へ入つて、元船まで荷物を運んで行つた。海が暗いので、何處らに船が繋つてゐるのか能く判らなかつた。

「何、こゝらの濱邊はやうく腰ぐらゐでございませう。」と、熊吉は説明した。「皆さまは船頭が負つてまゐります。」

荷物を運び盡して、船頭達にお房とお俊とお末の三人を負つて行つた。

「お忘れ物はございませんか。」
熊吉に注意されて、新九郎夫婦は暗い足下を見廻したが、そこには笠一つも残つてゐなかつた。いつまで待つても船頭どもは引返して來ないので、夫婦は不安になつた。熊吉も焦れ出した。彼は海にむかつて幾たびか呼んだが、浪の外には答へる

者もなかつた。

「何をしてゐやあがるのか。わたくしが鳥渡行つて見てまゐりますから、しばらくお待ちくださいまし。」

熊吉も衣服をぬいで、それを頸にまき附けて、海へざぶ／＼入つて行つたが、それぎり彼も戻つて來ないので、夫婦はいよ／＼不安になつた。

「船頭……船頭……。」と、新九郎は呼んだ。

「熊吉さん……。」と、千鶴も呼んだ。

夫婦の聲は暗い海にひびくばかりで、沖からは矢はり何の返事もなかつた。新九郎は堪らなくなつて、浪打際から二三間ばかり踏み込んで見たが、海は熊吉が云つたよりも深かつた。彼は衣服を着たまゝで大小を差してゐるから、油断すれば沈む虞がある。その中に大きい浪が被つて來て、彼は危く攫はれようとしたが、幸に水練の心得があるので、浪をくゞつて舊の岸へ早々と逃げ戻つた。千鶴はもう半狂亂

である。

「お房やあい、お俊やあい。お末やあい。」

彼女は浪打際を駆け廻つて、喉の裂けるほどに叫びつゞけたが、お房もお俊も答へなかつた。お末の聲も聞えなかつた。千鶴は夫に縋り附いて泣いた。

「あなた、あなた、こりや一體どうしたのでござりませう。」

「海賊船だ。」と、新九郎は唯一言云つた。

千鶴は氣を失つたやうに倒れた。倒れる妻に袖を曳かれて、夫も頷れるやうに砂に座つた。彼が火焰のやうな呼吸は、夜目にも灰白く見られた。

「だまされた。残念だ。」と、新九郎は唸るやうに再び云つた。千鶴は狂ふやうに聲をあげて泣いた。

その泣聲を聞附けたのであらう。夜釣の漁師らしい一人の老人が近寄つて來たので、新九郎は暗い沖を指さして、あすこに繫つてゐた船は何といふ船かと訊いたが

漁師は知らないと言つた。

「はあ、悪い奴等だ。」と、彼は新九郎の話を聴いて、氣の毒さうに云つた。この頃はここに悪い奴等が折々に立廻つて、不馴の旅人の荷物を奪つたり、女子兒を拐引したりすることがある。あなた方も屹と其災難に逢つたに相違ない。彼等の元船は遠く沖にかかつてゐて、盗んだ荷物や拐引した人間は舢舨舟に積んでゆくのであるから、今から追つても逆も及ぶまい。併しこの風では、恐く大阪へゆく船であらうから、些とも早く大阪へ行つて其詮議をするが可からうと、彼は親切に教へてくれた。

新九郎はいよ／＼落膽してしまつた。いかに足摺して悔んでも、相手は暗い海を走る船である。逆も追附くことは出来ないと思ひ、彼は半狂亂の千鶴を慰めながら兎もかくも宿へ引返して、熊吉の身許などを詮議したが、宿でも詳しいことは知らなかつた。近所の旅籠屋を一々聞合せるに、この家からも今朝船出した

客のないことが判つた。熊吉は新九郎夫婦をあざむいて、二人の娘と女中のお末と手荷物一切を奪ひ去つたのである。幸ひに路用の金だけは肌に着けてゐたので、夫婦はこれから眞直に大阪へ追つてゆくより他はなかつた。

「早く大阪へ行き着いて、役人に頼んで調べて貰へば、荷物は兎も角も、娘達の安否は屹と判る。力を落すな。」

千鶴はもう氣拔したやうになつて、掛々しい返事もしなかつた。新九郎は宿で朝飯を濟ませて、すぐに大阪へ向つて出發した。四月も既う末で、曇つた空は夜の明け頃から愈々暗くなつて、二人が新しく買った笠の上に細かい雨がほろ／＼と降つて來た。涙のやうな其雨に濡れながら、夫婦は悲しい旅をつゞけて行つた。

其二 女 七 人

(一)

お房とお俊とお末との三人は船頭共に負はれて、暗い海の上を元船まで運ばれて行つた。船の中も眞暗で、灯のかげ一つも見えなかつた。投げ込むやうに船へ押揚げられたかと思ふと、暗い中から二三人の男が出て来て、だしぬけにお房とお俊とを後手に引縛つてしまつた。

「あれッ」

お末が思はず聲をあげると、彼女は誰かに横つ面を二つ三つ殴飛ばされた。さうして、口に猿轡を喰ませて、これも後手に縛られた。何が何うしたのか些とも判ら

ない。三人は夢のやうな心持で、蓬の下へ無茶苦茶に押込まれてしまつた。お俊が泣聲を立てると、これも撲られた。

船の底には二寸ほども潮水が溜つてゐるので押込まれた三人は膝の上まで浸されながら、窮屈に座つてゐた。十五のお房と十一のお俊とはもうぼんやりして了つて何の分別も付かなかつたが、お末は流石に十七である。ことに確固した氣性の女であるので、斯うした不意の出来事におどろきながらも、氣を鎮めて四邊の様子を窺ふと自分達のそばにはまだ三四人の人間が轉がされてゐるらしかつた。暗いので能くは判らないが、その唸り聲や泣聲が皆な女であるらしく思はれたので、お末も初めて覺つた。これは話に聞いてゐる海賊船であらう。彼の熊吉といふ男も其同類で御主人をだましてお嬢様二人と自分とを拐引したのであらう。そこに初めて氣が注ぐと彼女は口惜かつた、悲しかつた。情なかつた。併し今更どうすることも出来な

いと諦めた彼女は、唯おとなしく手を束ねて海賊どものする儘に任せてゐるより他

はなかつた。

「斯うなつたら仕方がない、せめてはお嬢様お二人を守護するのが自分の役目だ。」と、お末は雄々しくも決心して、呼吸を嚙み込んで暗い船底にうづくまつてゐた。船はやがて何地の方角へか走り出したやうであるが、西へ行くのか東へ行くのかお末には固より見當か付かなかつた。その中に海がだんだんに白んで、曉の光は逢の隙間から薄白く流れ込んで来たので、彼女は眼を定めて透して視ると、自分達のそばに轉がつてゐるのは皆な若い女達であつた。海賊どもはこの幾人の女達を拐引して何うする積りであらう。それを考へると、お末はまた慄然とした、山椒太夫のところへ賣られて云つた對王と安壽姫、その怖ろしい昔話を思ひ出して彼女は身顛ひが止まらなかつた。

お俊は夜中に起されて睡眠が足りないのと、先刻からの驚愕に氣疲れがしたのであらう、姉の膝の上に俯伏して他愛なく眠つてゐるらしかつたが、お房は流石に眼

が冴えてゐるらしく、妹の肩に顔を伏せて嗚咽をしてゐた。何とか聲をかけて慰めて遣りたいと思つても、お末の口には猿轡が喰まされてゐる。兩手は背後に縛られてゐる。彼女はよんどころなしに、肩を張つて自分の傍にゐるお房の肩を突くと、お房も顔をあげた。うす明るい船の底で二人は眼を見合した。

「末や。」と、お房は低聲で云つた。「阿父様や阿母様は何うなさつたらう。」おそらく濱邊に取殘されたことゝ察してゐたが、お末は口を利くことが出来なかつた。彼女は眼を濕ませてお嬢様の顔を見つめてゐると、お房は又訊いた。

「この船にお出でなさらないのだらうか。」

お末は首肯いて見せると、お房はわつと泣き出した。聲を立てたら又撲られるであらうと、お末ははら／＼しながらも、口で教へることが出来ないで、彼女は肩を揺つて幾たびもお房を小突いた。さうして叱るやうな眼をして其首を激しく掉つて見せたので、お房もやう／＼會得したらしく、涙を噉り込んで黙つてしまつたが

やがて又窃と囁いた。

「わたし達は何處へ連れて行かれるのだらう。」

それはお末にも判らなかつた。彼女は情ない顔をして首を掉つて見せると、お房の顔には一面に涙が流れた。今日は沖も陰つてゐるらしく夜はすっかり明け放れたらしいのに逢の隙間を洩れる光は薄かつた。四月の末と云つても、うす暗い船の底殆ど膝まで水に浸されてゐるので、お末の身體はもう堪らないほどに冷えて来た。お房も身を竦めて顫へてゐた。その中に海は又だん／＼に暴れて來たらしく、お末もお房も行儀よく座つてゐられない程に揺られた。浪の音がすさまじく聞えた。「寧ろ難船した方が優かも知れない。」と、お末は思った。

海はいよ／＼暴れて來て、そこらに正體なく轉がつてゐる女達も、苦しうに唸りながら揺られてゐた。今日の時化は過日よりも強いらしく、お末もお俊も揺られて揉まれて、終には轉がされてしまつた。逢の間からは浪が時々打込んで來るの

で、頭から水浸りになりながら皆な唸つて苦しんでゐた。常人達は夢中で何にも考へてゐなかつたが、實はこの時化がお末やお俊に取つては天佑であつた。若し海の上が靜穩で無事の航海をつゞけて行つたらば、獸のやうな海賊共は若い女達に對して何んな迫害を加へたかも知れなかつたが、何分にも此の大暴れで彼等も自分達の獲物を見返つてゐる餘裕がなかつた。彼等も一生懸命になつて、怒れる海と闘つてゐた。

それから一日経つたか、二日を過ぎたか、お末もお房も夢中で何にも記憶してなかつたが海はいつか鎮まつて暗い夜になつた。四五人の男が黙つて入つて來て、そこから轉がつてゐる女達の襟髪を取つたり、帯を攫んだりして、荷物を運ぶやうに船端へ引摺り出した。その一人は蠟燭に火を點けて持つてゐた。

「おとなしくしろ。騒ぐと海へ投げ込むぞ。」

先づ斯う嚇して置いて、彼等は女達の繩を解いた。お末も猿轡を外された。と思

ふと、彼等は大きい桶をけに潮水を汲んだのを持って来て、女達の頭から容赦なしにざぶざぶと浴あびせた。それから女たちの帯を解いて、衣服を脱ぬがせた。褌ふんどしまでも剃はぎ取つた。斯うして赤裸あかはだにして置いて、頭から既う一度潮水を浴あびせかけた。

「これを着て行け。」

古浴衣ふるゆかたと繩なはの帯おビを投げ出された。赤裸あかはだの女達はあわて、其浴衣を肌はだに着けるとすぐに又うしろ手に縛しばられてしまった。男どもは彼等かれらをそのままにして何處どこへか行つてしまふと、入替いれかつて一人の老人が来た。老人はもう六十位の男で、手には小さい提灯ちやうちんを持つてゐた。

「やれ、やれ、可哀あはれさうに。」と、老人は嘆息ためいきを吐いた。「お前さん達も大抵察たいていしてゐなさるだらうが、この船は海賊船かいぞくぶねで、お前さん達は海賊に拐引かひりされて來なすつたのだ。何分お氣の毒どくに思ふから、私が皆な買取かひつて助けてあげる。何、幾許いくばでもない彼奴等あいつらは人間を大根か南瓜かぼちゃのやうに思つてゐるんだから、廉やすい値段で私が相談を決

めた。皆さんにも又それ々のお望のぞもあらうが、それは陸へ上つてから改めて御相談ごさをしませう。何しろこゝで彼是れ云つたところで仕方しかたがない。陸へ着つけば助かる道は何うでも付く、斯う云つても、まだ不安心ふあんしんに思ひなされるか知れないが、私は海賊の仲間なかまでも何でもない。これが一つの道樂だうらくで、今までも斯うして大勢おほぜいの人間を救つたことは度々ある。陸へあがつて土地の人に訊きいて見なされれば判わかります。わたしは菩薩ぼさつの七兵衛べんゑと云ふ綽名あだなを取つてゐる位の男で、慈悲善根じひぜんこんを積むのを身の務つとと思つてゐます。さあ、判わかつたらば此船を早く出でなさい。」

彼は噛かんで啣くめるやうに云ひ聞かせた。この老人が果して當人たうじんの云ふやうな菩薩であるか何うかは判わからないが、この場合、兎もかくも此老人に縋すがつて此船から逃のがれるより他にないとお末すえは思つた。ほかの女達も同じ考慮かんがであるらしく何分宜しく願ねがはますと老人の前にひざまづいた。

「あゝ、判わかりましたか。それで私も安心あんしんした。さあ、お出でなさい。」